

支援機関に対する アンケート調査結果

<p>1. 支援サービスのPRについて 貴組織の支援サービスを若年者本人や保護者の方々に認知してもらうために具体的にどのような活動、働きかけをしていますか？</p>
<p>自治体とのネットワークによる機関紙掲載等。 在学時からのアプローチを強化し、卒業後の離職や中退時のケアにつなげる。 ・盛岡市全戸へチラシを配布する（盛岡市広報にチラシをはさみ込む形で） ・広報などに掲載してもらう</p>
<p>1. 地域若者自立支援ネットワーク関係機関及び若年者を支援しているNPO団体や高校へ事業案内を送付または直接訪問し、事業説明を実施している。 2. NPO団体や高校等へ出向き、保護者会への講演及び、事業説明を実施している。 3. 公民館や文化センターなどにポスターやリーフレットを配布している。 4. ホームページの開設及び市町村、関係機関への広報誌に事業を掲載。 ・県庁と協力し、県内行政機関（市役所、保健所、図書館など）にチラシの設置。 ・ホームページの作成。 ・県報「彩の国だより」によるイベントの告知 ・県の広報誌（県民だより）への掲載 ・県内各市町村広報誌への掲載依頼 ・ポスター・リーフレット等を作成し県内公共施設へ毎月送付（県民センター、公民館等）</p>
<p>立川市内の保健所、福祉サービス施設、相談窓口、ハローワーク等に毎月のたちかわサポステのスケジュールを置いてもらい、宣伝していただいている。 毎月行われる業務連絡会（クリニックや支援施設など）で宣伝している。ネットワークの繋がりの中でリファーしていただいている定時制高校で子どもたちに宣伝している。 ・HP ・足立区報「ときめき」掲載 ・足立区行政施設へのチラシ設置 ・民生委員・青少年委員・PTA等の集会参加 ・商工会議所等企業へのアピール ・町内会の集会、回覧板等 ・マスコミ取材の積極的受け入れ ・政治家等視察受け入れ</p>
<p>*各新聞社に取材してもらう。サポステの情報（セミナーやイベント）を知らせる。 取材・掲載新聞社（新潟日報・朝日・読売・三条・聖教）</p>
<p>*県広報・市広報</p>
<p>*三条・燕FMラジオ放送に担当カウンセラーや、ソーシャルワーカーが出演</p>
<p>*ラジオ放送にセミナー・サポステを流してもらう</p>
<p>サポートステーションの事業説明をおこなう</p>
<p>*各地域の民生委員児童委員協議会定例会へ</p>
<p>*サポステ説明会（新潟県見附市・加茂市・旧吉田町・三条市）</p>
<p>*定時制高校の保護者向け講演会</p>
<p>*ライオンズクラブ・ロータリークラブへの協力依頼</p>
<p>ネットワーク会議に参加</p>
<p>学校関係者（県立4校）</p>
<p>企業関係者（4社）</p>
<p>地域関係者（商工会議所・商工会等）</p>
<p>行政関係者（市・県・新潟労働局・ハローワーク）</p>
<p>（1）県の心の健康センター、5か所の厚生センター、富山市保健所を訪問し、ひきこもり等の相談を受ける中で、就労について相談があった場合、サポートセンターを紹介してくれるように依頼した。</p>
<p>（2）ひきこもり親の会の例会等に参加し、サポートセンターで就労支援を行っていることを説明した。</p>
<p>（3）市町村へ広報誌に掲載してもらうよう依頼した。</p>
<p>・地元新聞の相談欄に毎日「ニート等若者の自立支援の相談」として、電話番号とともに掲載している。</p>
<p>・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。</p>
<p>・保護者説明会を開催し、支援サービスの理解、認知に努めている。</p>

福井県が組織する若者自立支援ネットワーク（ハローワーク、ジョブカフェ、医療機関、教育機関他）の各関係機関や一般市民への周知を図るため解説のチラシ、パンフレット等を作成し、配布するとともに、セミナーや活動状況について新聞、雑誌、テレビなど報道機関の協力を得て、広報・PR活動につとめている。
・県の広報誌に記載
・県下52町村を訪問し、チラシの配布とポスターの掲示をお願いした。
・各福祉事務所、保健所を訪問しチラシの配布、ポスターの掲示をお願いした。
・大手スーパー等にチラシを置いてもらう。
・県内報道機関に広報依頼する。
・（財）青少年育成山梨県民会議の広報へ掲載。
・近隣の市町村に回覧板での各戸回覧をお願いした。
・県の家相相談員、甲府保護司会、県民生委員、県立学校生徒指導担当者の研修会等で話す機会を得てチラシ、ポスターをお願いした。
・新聞の無料掲載欄へのイベント告知
・新聞に記事を載せてもらう
・行政機関との密な連携体制を作っておく
・ホームページやチラシによるPR
①若者就労支援研究会のメーリングリストで情報提供する。
②行政及びその出先機関等に情報提供する。
③おしごと広場みえ（ジョブカフェ）及び県や関係機関との協働による、就労支援イベント・講演会への参加をする。
④おしごと広場みえ（ジョブカフェ）と共同で新聞おりにこみ広告・FM三重放送する。
⑤報道機関に働きかけて、サポートステーションのセミナー・イベントを取材し、記事にしてもらう。
チラシなどの広報物（市役所、町役場、労働局、保健所、精神保健センター、地域振興局、少年センター、中学校、高校、大学、短大、民生委員、支援団体）
ホームページ（ヤングジョブセンター滋賀、県庁）
少年センターだより・市政だより
新聞
ハローワーク面接会での周知活動
・ポスター・チラシ 関係機関における配布
・市広報誌
・本人向け・保護者向け個別事業広報にて、その都度新聞広報記事の掲載
・開設時、ジョブカフェ・ヤングジョブスポット・サポステの違いについて企画記事にて紹介
・専門相談サテライトとして、ジョブカフェ内（臨床心理士週間）、青少年活動センター内（保護者向け週間）2カ所開設
・その他関連機関催しにおける広報ブース展開など
①府や市町村、関係機関、団体を通じて広報資料を配布する
②ネットワーク会議を開催し、関係機関・団体との連携を維持する
③広報媒体（チラシ・ポスター）の作成・配布
④JOBカフェOSAKAなど主催イベントでの広報（プログラムの一環に出張相談を企画実施するなど）
⑤保護者対象講座を通じての広報
・新聞各紙に開設記事の掲載。神戸市全世帯に配布の広報誌に特集記事の掲載。
・NPOなどの支援団体や行政機関を通じて情報の周知。
・県域および神戸市の関係機関窓口リーフレットを配布。
・神戸市各区の保健福祉部担当者へ個別の事業説明を実施。
・ホームページを開設して情報の提供。
・各マスメディアを通じての働きかけ（ラジオ、新聞、テレビ取材等）
・リーフレット、チラシ等の設置（市町村、県窓口）
・支援セミナー（各団体開催）への参加
1. 親に対する講習会、講演会の実施
2. パンフレット、チラシの学校等への配布
県や市の勤労青少年ホームとの連携を通じた行政機関への配布
3. 研究会会員を通じたPR

<p>新聞、TV等（瀬戸内海放送、NHK高松放送、四国新聞、読売新聞等）で記事を掲載していただく他、県下の各ハローワークへ定期的に情報提供を行い、中でも若年者を対象としている「しごとプラザ高松」のフリーター専門窓口の担当者からの誘導を依頼している。また、労働局や商工会議所等が主催する中途採用希望者等を対象とする就職面接会などの会場でサポステを案内するブースを設置し、利用に当たっての説明を行っている。</p> <p>また、県教育委員会を通じて進路指導や生徒指導担当教諭への紹介、特に定時制・通信制過程を持つ高校の教諭への周知をしている。他の機関としては県精神保健福祉センターや医療機関にパンフ等を設置し、案内してもらう。引きこもりや不登校の保護者の会に対しての情報提供も行っている。</p>
<p>[チラシ・リーフ等の設置] 現在チラシ9000枚、リーフ4600枚配布済。 県内行政機関、経済団体等の窓口へ設置。高校、保健所等の担当者へ配布。 伊予鉄道の駅への設置等。ネットワーク連携先の病院、就労支援機関等へ配布。</p>
<p>[名刺型カードの設置] 現在13000枚配布設置済。県内各コンビニに設置予定。</p>
<p>[タウン情報誌] セミナーの案内を掲載。</p>
<p>[マスコミの活用] 開所時等の報道。県民だより等での活用。</p>
<p>[他機関の講演会] 労使就職支援センター主催の講演会に相談員がパネラー出演。</p>
<p>1. 福岡県（生活労働部）より、県下の市町村・ハローワーク等の関係機関に事業を紹介するリーフレットを配布。</p>
<p>2. 地元紙の西日本新聞での記事掲載。福岡市、北九州市の市だよりでの告知（定期的な保護者のセミナー）。</p>
<p>3. 県内の各市役所、ハローワーク、自立塾等への直接訪問での働きかけを実施中。</p>
<p>説明会の開催、HP、資料配布</p>
<p>県内マスメディアに告知の情報を流した 取り扱ったマスコミ NHK仙台放送局、東北放送、ミヤギTV、河北新報</p>
<p>1. 専門ホームページの作成、定期更新</p>
<p>2. 広報ツール（チラシやパンフレット等）の拡充</p>
<p>3. 新聞等マスコミへの取材依頼</p>
<p>4. 県、自治体の担当部局との連携（広報誌への掲載、ポスティング、人の紹介など）労働局との連携</p>
<p>5. 説明会、相談会の定期開催、講演会への参加</p>
<p>6. 他の支援機関、団体と協力してのシンポジウム、イベントの開催</p>
<p>7. 学校、フリースクール支援団体等とのネットワーク作り、人の紹介、マッチング体制づくり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースタート事務局ホームページ ・ニュースタート事務局で行う全国講演会での資料配布 ・月2回、東京事務所における定期説明会の実施 ・千葉県を中心としたハローワーク・ジョブカフェなどでの広報活動
<p>自立塾主催の全国セミナー開催</p>
<p>HPの更新</p>
<p>関係諸機関への定期ニュースレターの送付</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・小田原・横浜で定期的に説明会を開催。 ・「ニート・ひきこもり」をテーマとした講演会の開催。 ・教育機関、行政機関、福祉施設、民生委員、他の民間支援団体等にパンフレットやチラシを配布。 ・HPによる募集。
<p>隔週の説明会、個別面談をコツコツとしています。</p>
<p>面談をした人にハガキ、t e lでの後追い。</p>
<p>ホームページ・講演活動・教師向けの研修会・関連機関の訪問・マスコミを通じてテレビ・ラジオ番組・新聞記事などDVDの作成（保護者にパンフレット送付の際提供配布）</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ときどきマスコミを使う（地元テレビ、新聞、雑誌） ・共同で説明会 ・面接 ・訪問
<ul style="list-style-type: none"> ・月に一度の説明会の実施。上田市の協力を経て駅前の情報ライブラリーセミナールームを使用しての開催。毎回入塾希望者が参加している。（平均4組）

<ul style="list-style-type: none"> ・長野労働局・長野県商工部・ジョブカフェ信州の協力を得ながら、パンフレットを各ハローワーク、ジョブカフェ信州に置いてもらうほか、担当者の事前研修を経て、入塾の必要がありそうな相談者を紹介していただけるようなルートを構築している。
<ul style="list-style-type: none"> ・HPの運営。
<ul style="list-style-type: none"> ・県への協力依頼
<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムの開催
<ul style="list-style-type: none"> ・各ハローワーク、NPO団体、高校へのチラシ配布
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページ
<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ、テレビへの出演
<ol style="list-style-type: none"> 1. ホームページ、ブログの活用
<ol style="list-style-type: none"> 2. テレビ、新聞の取材…プレスリリースを積極的に実施
<ol style="list-style-type: none"> 3. 自主または委託を受けてのセミナーを通じた活動紹介
<ol style="list-style-type: none"> 4. 広報誌作成→行政、連携機関への配布
<ul style="list-style-type: none"> ・メディアを使った広告
<ul style="list-style-type: none"> ・問い合わせから訪問活動まで。TELだけの対応ではなく、実際に会って話をしている。
<ul style="list-style-type: none"> ・各機関にパンフレット等配布
<p>■啓発業務として</p>
<ol style="list-style-type: none"> 1. 講演会の講師依頼があれば積極的に出ている <ol style="list-style-type: none"> ①府及び市の社会福祉協議会主催 ②家族会主催 ③大学または専門学校
<ol style="list-style-type: none"> 2. 取材依頼 <ol style="list-style-type: none"> ①新聞の全国及び地方版 ②大学の研究チーム
<p>■個別的面接相談</p>
<ol style="list-style-type: none"> 1. 家族または本人 2. 家族または本人の近い関係者
<p>■当法人利用サービス案内の配布と設置</p>
<ol style="list-style-type: none"> 1. 各行政機関 <ol style="list-style-type: none"> ①保健所 ②市役所市民ふれあい広場 ③教育センター
<ol style="list-style-type: none"> 2. 就労またはニートサポート機関 <ol style="list-style-type: none"> ①ハローワーク ②ニートサポートセンター
<ol style="list-style-type: none"> 3. 就労支援センター 4. 地域生活支援センター
<p>各相談会の実施、セミナーの開催。ポスター・パンフレットの配布。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・市・町役場へのパンフレット配布
<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットでの情報公開
<ul style="list-style-type: none"> ・若者交流館との連携（就職サポート相談会への参加や情報交換）
<ul style="list-style-type: none"> ・四国内・中国地方の一部、近畿地方の一部のニート支援をしている団体、行政へパンフレットと活動報告等を郵送する。高校にも送る。該当する方に声をかけてもらう。
<ul style="list-style-type: none"> ・スーパー・病院等にパンフレットを置いてもらい、紹介してもらう。
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページにはできるだけ詳しい内容を載せる。（安心してもらえる）
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の会、当事者の会、支援者の会等で成果を発表している。
<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に説明会を実施している。
<ol style="list-style-type: none"> 1. 機関（月間）紙「四恩の里」を通して活動の理解と募集のお願いをしている。
<ol style="list-style-type: none"> 2. 定設説明会場と一般会場にて月に最低2度の説明会を行っている。
<ol style="list-style-type: none"> 3. 各地域ごとでの講演会等で資料を配布しPRにつとめている。
<ul style="list-style-type: none"> ・各地で説明会を行う
<ul style="list-style-type: none"> ・市報に掲載してもらう
<ul style="list-style-type: none"> ・各地方自治体労働省関係先窓口等掲示チラシの配布。（その他大学等教育窓口）
<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムの開催。
<ul style="list-style-type: none"> ・サポステとの連携による集会講演など行って、認識の強化につとめている。
<p>新聞社等の報道機関への協力依頼</p>
<p>鹿児島県共生・協働の地域づくり事業として紹介される</p>

塾単独の活動報告と入塾相談会
労働局・ハローワーク・県労働政策課との連携、協力依頼
青少年育成県民会議での指導員研修参加
①ハローワーク、ヤングジョブスポット、キャリアセンター、東京都しごとセンターにリーフレットを持参し、PRを依頼している。
②全国17都市において、ニート、ひきこもりのシンポジウムと個別相談会を実施している。
③沖縄においては新聞、ラジオ、テレビで取材報道と広告を併用している。

<p>2. 支援方針について 貴組織の支援方針、支援を行う際の基本的な考え方や姿勢はどのようなものですか？</p>
<p>勤労青少年ホーム内にサポートステーション機能を持っているという特色を生かすため、グループワークを手法とした若者の相互作用を支援方法の一つとしている。そのため、カウンセラーは関係機関へのリファーのほか、個対個の面談がベストな場合と、グループ体験が必要な場合の見極めを行っている。</p>
<p>来所者には、それぞれ生き立ちの違い・個性があるので、「面談」「見立て」を慎重に行い、それぞれの方に合った支援策を検討していく。</p>
<p>本人やご家族との信頼関係を大切に、個別的・包括的・継続的な支援を心がけている。 相談を受けた結果、関係機関のリファーが生じた場合、たらいまわし感のないように配慮している。 また、庄内地域ならではのネットワーク機関の連携による支援を考え、ネットワーク構築を積極的に行っている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「育て上げ」 ・横のネットワーク（支援機関を結ぶ）のステーション ・一人一人の背景や性格、障害等を把握し、それぞれに応じた支援を行う。 ・通所施設として学習や訓練、相談を継続的に実施する。 ・ハローワーク、障害者支援施設、若者自立塾等必要な機関との連携。
<p>他機関へリファーするまでの状態にサポステの中で育てる。</p>
<p>完結したワンストップサービスを目指すのではなく、常に次のステップを模索していく。 キャリコン、臨床心理士、経験値の高いスタッフが明確な出口（リファー先）をイメージしつつ、同世代のスタッフ、ボランティアが共感しながら、共に悩み、共に成長していく場。 就労・就学後も定着サポートを行い、ガス抜きの場合や、相談を継続していく。</p>
<p>当事者個々の状況にそって、本人の意志を尊重しながら一歩を踏み出せるようにサポートしていく。具体的な支援（自立セミナー・就労セミナー・居場所・しゃべり場等）を提示し、日々の生活に変化をつけ、他者との関係性を持てるように当事者が選択して参加する居場所やセミナーを用意している。 最終目標は就労であるが、自信を持ってない当事者に日々の生活に変化を持たせ、生活感を感じてもらいながら、一歩を踏み出してほしい。ジョブトレーニング・インターンシップなどの支援プログラムを提供することによって、就労や起業なども含む社会参加を行える若者を増やし、地域を活性化することの目標としている。</p>
<p>(1) 専門のキャリアコンサルタントが、若者が働く意欲や自信を取り戻すことができるよう相談・支援を行なうほか、臨床心理士による相談を行う。</p>
<p>(2) 若者の把握・誘導する若者自立支援ネットワークを構築し、ニート等の若者に各個人の状況に応じて個別的、継続的に包括的な支援を行う。</p>
<p>一口にニートといっても、それぞれの若者の置かれた状況に応じて必要とする支援は、様々であり、まずは、ニート等の若者の相談に応じること、その上で、個々の相談に来た若者が求めている・必要としているもの（本人が意識していないものを含めて。）を把握し、適切な支援が受けられる機関に誘導し、相談に来る前の状態から一歩でも改善されるようにしたいと考えている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・（福祉施設での労働体験）発達障害の疑いのある方は、福祉作業所などで、作業への慣れ、人間関係の作り方などを学ぶことができる。 ・（グループワーク）複数の人数で、半強制的に接する（コミュニケーションゲームなどで）ことで、楽しい雰囲気の中で人間関係が向上する。仲間の動きに触発されて働き始める人などが出ている。 ・（フリースペース、サポステカフェ）自由な空間で、自ら動き出す（サポステカフェはまだ開所して間もないので成果は見られない） ・身近な相談窓口として気軽に来訪できるような雰囲気を作っている。 ・傾聴した結果より具体的な支援プログラムを作成するよう心がけている。 ・対象者、保護者の不安を少しでも取り除いて、目線が上がるよう心がけている。 ・相談内容によっては、他の施設へリファーすることもあるので、相談者にとって、最も良い結果が得られるよう、ネットワーク作りを行っている。

・相談件数の多い少ないで、その施設が判断されがちであるが、一人一人の内容をしっかりと受け止めている。
・本人の意志を大事にあつかう
・個々に向き合い、一緒に考えてゆく
①相談は、インテークは無条件で受けている。終了後、サポートステーションで継続支援するか他機関へリファーを検討する。
②個人のニーズに応じて、効果を確認しながら当人に合った支援を行う。
③必要に応じて専門機関の担当者とともに支援にあたる（ケース会議をもつ）。
「滋賀県ニート問題連絡協議会」参加団体をはじめとする地域のネットワークを活用して、各若者の置かれた状況に応じて、包括的な支援を、個別・具体的に実施していくこと
ユースサービスの考え方として、若者が自分の本来持っている力を損なわれることなく、課題を自ら乗り越え、解決していくための力を獲得できるよう支援する。
「相談者ひとりひとりを大切にすることで、できることとできないことを明確にして、できる限り適切で、きめ細かい支援を行う。できることを多くしていく工夫・努力を心がける」
そのために「初期見立て」を重要視している
①丁寧なインテークによって、相談者の来談目的・主訴・現在の状況を聴き取る。
②①にもとづき、必要な支援は何かを見だし、どこまでをサポステが担い、もし他のリソースが必要であれば、どう組み合わせるかの支援プランを立てる。
③②をより精確にするためにスーパーバイザーによる「個人スーパービジョン」「グループスーパービジョン」「コンサルテーション」や、支援員相互の「カンファレンス」を定期的実施している。
④支援プランに沿ってメンタルサポート、キャリアサポートを役割分担しながら提供している。
⑤外部リソースを活用する場合、できるかぎり相手先の支援内容や支援スタッフについて把握しておくよう各現場支援員とコンタクトをとったり、見学に出向いている。
・相談者の心に沿ったカウンセリングを実施する
・本人が変わるには、まず保護者・家族から変わってほしいとの思いで対応します
・終結後のフォローを丁寧に取り組み、いつまでも来所しやすい環境づくり
・家族面談、本人面談を必ず行う
・訪問支援を充実させている（訪問支援のノウハウをフルに活用する）
・家族・本人・現在のかかわっている団体、クリニックとの連絡、相談、報告を綿密に行っている
・無理をさせる自立でなく、本人からの（本人の意志での）自立を大切にしている
1. 過去の就職活動の失敗や職場での挫折より就労に踏み出せない若者に対して落ち着いた環境で自分を考えたり、仲間やスタッフとの交流の場としてフリースペースの活用
2. キャリアコンサルタント、臨床心理士による相談・支援専門的助言の実施
3. 体験・実践を場としてスポーツ行事イベント、他者との交流、職場見学、作業体験の実施
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
支援対象者の就職に向けての相談に留まらず、親子関係の改善をはじめ、家庭の悩み、金銭問題（多重債務）、軽度発達障害をはじめとする特別支援者に対してもネットワークの活用、進学への対応など総合的に対応を行う。対象者自身がこれから自らの力で少しでも活動できるよう支援を行う。その支援はサポステだけでなく、ネットワークを大いに利用していくものである。
1. 支援対象者本人及び保護者を対象とした面談による支援が基本です。（次期からは電話相談にも取り組みます）
2. 発達障害者は臨床心理士が支援し、グループ・カウンセリングに参加しコミュニケーション作りを図る。
若者を十把一絡げにしない。
自発的行動を実行するために、体験学習法、冒険的要素の考えをベースに行う。
・参加する一人ひとりが主体的に考え、行動できるように心を大きく育てる

・人とのつながり、仲間を大切にできるよう、思いやりの心を育てる。支えあえる信頼関係を築く
・動く、体験する。頭だけでなく、実感をもって判断できるよう経験をつむ
前半の甲府、後半の市川での活動中、あくまで塾生が自主的に動くこと。スタッフが押しつけることをしない。共同作業、共同生活が基本となるので、その中で自分の考え、意志を相手に伝えられること。コミュニケーション能力を高める。
保護者本人との密度の高い話し合いを続け、具体的な活動を提示しながら、徐々にステップを上げていく。無理な押し出しをしない。 本人とスタッフの信頼関係を重視。
・生活リズムを整えることで生命エネルギー（意欲）を高め、何事に対しても力を出し切る（はたらくこと・労働）で潜在的な能力の開発を目指す。
・多くの人と出会い、つながり合って互いに世話にされることでいきづまらない生き方を身につける。
・職場体験の機会を多く持ち、就労意欲を高める。
・具体的な支援
・切れない支援
・個別対応
就労意欲はカウンセリング・ケースワーク（就職活動の支援）・就労体験によって形成されると考え、そのためには、健全な身体作り（生活リズムの安定）、健全なこころ作り（カウンセリング・自分自身を知る・広い考え方を身につける）、就労体験（自身を持たせる・経験を豊かに・働く気持ちを持つ・自立心を身につける）、人間関係のスキルを身につける（共同生活とカウンセリングで身につける）、これらの4つの全体的なレベルアップをめざす。
①まず親子離れるために家を出る
②良い環境の中で体力をつけ生活リズムをつくる
③それを継続する
④やがて少し自信がつき目的がみえてくる
無理なく自然に就労意欲がでてくるように接している
・キーワードは「安心」。全ては安心して生活できる環境と、安心できる人間関係の構築であると考え、「就労体験」に入る前に、確実に「基本的な生きる力」を身につけさせることを最重要課題と考えている。凝り固まった「思考」の破壊から、生きることへの考え方の「再構築」を試みる。就労体験やキャリアプログラムはその後に生かされるものであって、それだけやっても彼らの確実なる社会復帰には繋がらないと考えている。よって、3ヶ月という期間に必ずしもこだわることはせずに、この入塾を一つのきっかけと捉え、確実に「自立」できる精神を育成することに重点を置いている。
ひきこもり、精神疾患の方への支援ではなく、あくまで就労を目標とした支援。
若年者のキャリア形成支援。
個々、様々な課題を抱える若者が、いきいきと活躍していくための基本的な姿勢を獲得するための訓練、教育、啓発的経験の場の提供、キャリアコンサルティングを実施する。
「絶対に見放さない」
本人の良い所をのばす方向性で支援をしている
本人、主体となるプログラム作成や、意見や興味のあることなどを中心に考え、プログラム作成する。
孤立からの回避として「仲間づくり」と「自助グループの参加」
自身の回復と親からの自立として「共働作業」と「単身生活」
就労を通じた体験学習で「自身で気付く」を促している
ニートには、①立ちすくみ型 ②つまづき型 ③引きこもり型 ④ヤンキー型 があるといわれています。
①②③タイプの特徴として挫折感から社会に踏み出せないでいることがあります。そこで、社会生活に必要な知識と技術を習得していただき、自信を取り戻し、再度社会参加が出来るように教育支援を行っています。
若者の主体性を尊重し、スタッフは支援者に徹する

<p><安全が一番> 自分と自分だけでなくいろいろな人を好きになってもらいたい。様々な人との関わりにより、感謝する気持ちや必要とされる喜びを知り、社会の中で生きていく自信を身につけてもらいたい。 大変だからこそ味わえる達成感を生活・労働・人間関係等の中から感じてほしい。</p>
<p>1. 生活習慣の再教育（昼夜逆転生活）が多いので規則正しい起床や洗面・整理整頓など）を中心としている</p>
<p>2. 体力・耐力の回復と鍛錬（スポーツや農作業を通して）</p>
<p>3. 共同生活を通じて「思いやり」を育てる</p>
<p>4. 適職を探して資格取得（当塾ではホームヘルパー等）</p>
<p>塾主体ではなく、本人主導を目指している。 ・当自立塾の支援は主体的「心育」にある。具体的にはモチベーションをたかめ、空転をさせない為の信念的教育に専念している。 NEET社会復帰の条件3段階を基本とする。すなわち入塾活動、教育、就業。その内の教育に重点をもち、当自立塾の方針としている。入塾活動及び就業活動も流れとして当然行われるが、教育こそわれわれの持場と考えている。</p>
<p>幼少時や学校生活において、対人交流の不得手意識があり、社会参加がスムーズにいかないなどの仮説を立てている。 漠然とした不安を抱えている者にとらえる。 自立に至らない悪循環の中にあるので、なるべく早く、悪循環を脱して自信をつけてゆく為の支援をしてゆきたい。</p>
<p>①対人コミュニケーション能力の向上、SST、自信をつける方法 当協会開発の「自信の一步」の活用、コーチングによる目標設定を行う。その後その人の興味、適性、可能性に合致する仕事に従事するため、約30種類の職種の話聞き、職場を訪ね、その中から2～3種類にしぼり込んでインターンシップを行う。</p>

<p>3. 支援目標について 貴組織の支援サービスを通して、利用者がどのような状態になるのが目標ですか？その目標とする状態について具体的に記述してください。</p>
<p>まずは社会性を身につけること。就職の前段階として、まずは他者と関われる状態まで支援することで関係機関へのリファーおよび就職活動へとつなげることができると考えている。</p>
<p>正社員として採用されることが目標</p>
<p>相談者が安心して相談ができる信頼関係をつくり、相談者が必要な支援に対して応えられる場であること。 その上で、相談者が自分に必要な支援について助けを借りながらも、相談者自身が自力で探していけるよう手助けができる通過点であり、その若者が、進路や就労に向けた意識を持ち、若者支援センターへの円滑なリファーを行うことを目標としている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・親が死んでも生きていける生活的・経済的・精神的自立
<ul style="list-style-type: none"> ・月10万円稼げる能力
<ul style="list-style-type: none"> ・就業に結びつけること
<ul style="list-style-type: none"> ・社会に出たくなる（ジョブトレ、相談などを通して）
<ul style="list-style-type: none"> ・人と関わることに少しでも楽しさを感じてもらう
<ul style="list-style-type: none"> ・相談やセミナーを通して自分のこれからのみちや方向性が少し見える状態
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の場合、相談を通して子どもに対する接し方を変え、少しでも本人をサポートにつなげていく
<p>就労・就学に限らず、社会参加のきっかけを一人ひとりの状況に応じアドバイスし、一定期間利用していただいた後、しかるべきリファーを行う。長期停滞者については臨床心理士を介し、医療機関、福祉へのリファーを行う。</p>
<p>自分自身を肯定し、他者との関係を持てる。（居場所やセミナーに参加）</p>
<p>ボランティア活動、就労、起業などもふくむ社会参加。</p>
<p>（次なるステップに向けて、動き出せる状態。ボランティア・就活・学校等）</p>
<p>目標： 就職活動や職業訓練などに踏み出せない若者が若者自立支援ネットワークを活用することにより、就職活動を継続して行い、就業する。</p>
<p>具体的には、</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 第一段階として、ニートが社会参加できるようにする。 (2) 正社員をめざすが、フリーターでの就業を可能にする。 (3) 障害のある人については、障害者雇用支援による就業。
<ul style="list-style-type: none"> ・基本的には、最終の目標は就職につなげていくこと。 <p>しかしながら、前述のように相談に訪れる方々の様子は様々であり、就職を拙速に急がせることはせず、就職に至るまでの段階（相談を通じたコミュニケーション力の回復、作業体験、職場での実習、あるいは専門機関での治療）を踏んで利用者のニート状態からの改善を図ること。</p>
<p>最終的にはその利用者の気持ちや状態により、目標が決まるものと考えています。基本的にはどんな形態にせよ、お金を得て働くことです。派遣、アルバイト、常勤、正社員とありますが、どれでも就労に結びついたらと捉えております。しかし中には「家族と話ができるようになること」や「自分の意見を言えるように」という目標も出てくることも考えられます。</p> <p>また、利用者の状況（年齢、性、家庭環境など）により、就労を目標とできない場合もあり、その場合は、「家庭内で家族と話ができる」「買い物に行くことができる」「自分のことを自分で判断できる」という目標になることも考えられます。</p>
<p>家族の一員としてまた社会の一員として、周囲の人たちとコミュニケーションがとれ、通常の世界生活が送れるようになること。 そして、それぞれはたすべき役割が自覚できその職責が達成出来るようになってもらいたい。</p> <p>就労し、人として自立してほしい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・なりたい自分になっていくこと
<ul style="list-style-type: none"> ・理想像の自分と今の自分のギャップの食い違いに気づくこと
<ul style="list-style-type: none"> ・自分は誰かの役に立てることを実感すること
<ul style="list-style-type: none"> ・今の自分でもいいのだと気づくこと

・自分の責任で自分の人生を歩まなくてはならないと気づくこと
①アルバイト・パート・派遣・正社員等職を得て、毎月いくらかの収入を得られるようになること
②個人の状況によっては適切な支援が受けられるようにすること
就職をはじめとする職業的自立。ならびに、それを目指したステップ上にある職業訓練、就職活動、セミナー参加、外出練習など。
・若者自身が様々な情報の中から自らに有用なものを読み解き、自らの判断のもと決定していけること
「社会参加・自立・就労という方向に向かって自発的に動くことができる状態になること」
「相談者のQOLとQWL (Quality of Working Life) が向上すること」
①第一は、相談者の来談目的（来談時に本人がことばで述べた目標）に沿った状態になる
②次には「支援員が理解し本人と確認しあった主訴」に沿った状態になること
③支援の過程を進める上での阻害要因が過大または長期を要し、当ステーションの支援範囲を超える場合にも、利用可能な他のリソースを利用してもらえるようにすること
・目標は長期的な生活設計が築ける、就労の場を得ること。 65歳まで働くことを想定したライフプランの組み立てを考えた、進路相談・就労支援。
・各レベルでいろいろあると思いますが具体例で書きます。
・完全引きこもり→外出、社会参加への接触→コミュニケーション、体力、気づかい、就労意識→就職活動
・親とのコミュニケーションの回復
・社会でのコミュニケーションの回復（あいさつ、礼儀）
・スポーツを通じての体力改善、団体行動への適応
・教室、サークル参加での気づかい、思いやりのトレーニング
・就労意識してのセミナー、各種行事参加
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
全体としては最終的に正規従業員としての就労が目標ではあるが、個人個人の状況・状態が違うため個々の現状から一步を踏み出すことが当面の目標としている。また就労についてもその就労するまでの過程として利用者本人が自ら考え自ら行動することによって、「他人に決められた」のではなく、「自分で決めた」という意識を持って就労することが最良と考える。
相談を通してまず対象者自らが目標設定を行えるようにする。 対象者の目標設定は就業、就職、訓練等、個別に行われ、相談、支援プログラムをしていく中で、軌道の修正も行われ、利用者自らの自立の方向を協働で模索する。中には、自己破産で再出発を願う者や障害者年金を受給してもらうことで生活の安定を図れる者もいる。 そのように各対象者が自ら掲げたものを当面の目標としている。 ポイントとして、どの時点で一連の相談の終結なのかを相談者、対象者とも共通の理解をし、明確にしておくことがあげられる。
1. 対人恐怖心を解き、コミュニケーションスキルを持たせること。
2. 就労体験により、働く自信と意欲を持たせて、自立の道へ出発させること。
前向きに生きられるようになってほしい。
・自分の意見を持つ
・自分の意志で行動する
・他者を受容する
・夢と希望を持つ
・創造的に工夫することをおしまない
・自らの人生に対して真剣に向き合い、主体的に考え行動できるようになること
・様々な経験を積むなかで、不安をへらし、自信を高めること
・信頼できる仲間をつくり、支えあえる関係を築くこと
・経済的自立を含む、自立

<p>就労が最終目標ではあるが、まずコミュニケーション。人の輪の中に入る。また、輪を作れるようにしたい。自己満足ではなく、他人からの情報も生かせるようにしたい。</p>
<p>本人の望みや目標とは、別に現実に進学や就労可能な状態を作ってゆく。</p>
<p>変化の激しい現代社会で自己の能力を発揮して変化に即応できる力を身につける。</p>
<p>具体的な目標にむかうこと</p>
<p>就職</p>
<p>進学</p>
<p>社会参加</p>
<p>働き続け、自立すること（経済的・精神的にも）をめざす。</p>
<p>まず当塾よりアルバイトへ出る。 そして卒業して自立する。それが継続できるようになる状態。</p>
<p>・まずは「家族」からの独立を果たすこと。経済的・精神的に独立できること。いかなる仕事であっても、自分の生活を維持する為にとにかくやってみる気持ちを持つこと。</p>
<p>・第一期卒業生によって、現在取り組み始めている、「塾生による起業」。現在企業と委託契約を結び、実際に仕事を請け負い始めている。いくつかの職種による「起業」を視野に入れて、卒業生が運営する「事業所」に、新たな入塾生が研修に行かれるような組織作りも計画している。</p>
<p>塾における合宿終了後、2ヶ月内全員の就労もしくは就職につながる成績合格</p>
<p>1. 経済的自立を果たす。</p>
<p>2. キャリア・デザインを持つ。</p>
<p>3. 積極的な社会参加を果たす。</p>
<p>仲間と連携をとり、助け合いながら就職につく状態を目標とし、主に、長期就労を目指している。また、同じ塾生同士がコミュニケーションをとり、卒業後も関係性を持ちながら就労につけることを目指す。</p>
<p>親または他者に依存するのではなく、本人なりの自立した生活ができるようになる。就労を通し社会性を身につけ、経済的に安定し生活技術が獲得できればと願うわけですが、実質的には非常に時間のかかる問題だと感じています。現状では「自己決定」「自己責任」を最重要課題としており、自己表現が円滑になり活気と爽やかさを身につけていただきたいと思います。</p>
<p>あきらめない…失敗してもかまいません。続けることが良いことです。 ※失敗を恐れず、経験を積むことが、チャンスを逃さないコツです。</p>
<p>信じること…すべての人間には無限の可能性が 있습니다。 ※夢を語り、夢を創りましょう。3年後、5年後の自分を信じて頑張りましょう。</p>
<p>上記のような気持ちになっていただくことを目標としています。</p>
<p>就労を継続し、自活すること</p>
<p>・心から結ばれる関係（友情・親子）を知る。</p>
<p>・社会に出る。（お金をかせぐ）税金が払える人間になる。</p>
<p>方針が目的そのものですが</p>
<p>1. 体力・耐力を身につけて</p>
<p>2. 他への思いやりを養い</p>
<p>3. 資格取得を通して社会に貢献できる人間を育成すること</p>
<p>・本人のやる気が出る</p>
<p>・前向きな考え方ができるようになる</p>
<p>・コミュニケーションが上手になる</p>
<p>・支援サービスという言葉は誤解を生む。家庭でサービス過多の生活をし、その為に自主性を失った若者がNEETの主体である。当自立塾は社会の個である若者の精神力強化を目標にしている。当然にして社会人としての自主性を育むことを大目標としている。</p>
<p>精神面では自尊意識が回復すること。 結果として、必要な自己主張ができ、対人交流のストレス対処となること。</p>
<p>就労による経済的自立。</p>
<p>①自分に「やればできる」という自信をつけ、興味を持って継続してできる仕事を見出すこと。</p>
<p>②週40時間労働に従事できる能力と体力を身につける。</p>
<p>③他の人と共働できるコミュニケーション能力の獲得。</p>

4. 利用者の状態の見立てについて
4-1. 初回（インテーク）面談の時などで、 利用者の過去の状況や現在の状態をどのような方法で情報収集していますか？
・利用者カードにパーソナルデータを記入してもらっている。
・60分の面談中に話の流れの中で、生活リズムや学歴・アルバイト歴に触れ、質疑応答形式で行う。利用者自身が話すこと（問題として意識していること）を中心に話題を広げながらの情報収集を心がけている。
・初回面談および臨床心理士による見立てを合わせ判断
・言葉だけでなく表情をみる
受付票への本人記入とカウンセリングによる聴き取り
本人記入による学歴・職歴の記入
ヒアリングによる現在の状況、悩み、今後の方針の見立てなど
・基本的な住所氏名年齢等はこちらから聞く
・相談者が話す内容を取捨選択したり質問したりして情報を得ている
インテークシート記入後、スタッフが簡単に質問する。
あとは、相談員が聞く情報を集める。
本人記入とスタッフのヒアリング
ハローワークからの瞬間利用も多いため、キャリア・カウンセリングを受ける
セミナーに参加する、明確な支援要望がある、長期的に利用することが見込まれる利用者のみインテークを行っている
カウンセリングを行う。
相談にこられた時点で、自分のことを話したいという当事者が多く、比較的スムーズに過去・現在の状況を話してくれる。
当事者が家族の状況を話していくことで、情報は得られる。
当事者が話されることを、受け止めている。
本人から
(1) 今、どのような生活（起床時刻、一日の行動状況）をしているのかの問いかけ
(2) 仕事に就いていたことのある人には、仕事内容の適否、職場での悩みについて問いかけ
(3) コミュニケーション能力、ビジネスマナーの各々26項目について、本人の状況を把握する
家族から
(1) 本人が今どのような生活をしているのかの問いかけ
(2) 本人と家族のかかわり状況、生育時に気づいたことの問いかけ
・来所された方（ご本人、それ以外問わず）からの聞き取り。
・ご本人以外の場合も、何らかの形で本人とコンタクトを取る努力をしています。
・本人から重要な情報がどうしても伺えない場合、ご両親等から伺うこともあります。
最初は、当方で作成した個人記録表に従って聞き取りを行います。基本的な個人情報聞きながら、次第に自由な聞き取りをしていきますそれは、主に本人の主訴を聞き、家庭・生育歴・人間関係などをさりげなく聞ける状況をつくり、場合によって本人ばかりでなく親など家庭からの状況を把握します。
・相談受付票に、現在の状態、学歴、家族構成、主訴等を記入してもらっている。
・情報を補う形で、口頭で答えの書き方、筆跡、話し方等行動観察も活用している。
・ひきこもりの人には、その程度また発達障害が疑われる人には、生育歴等をポイントをしぼり質問していく。
・相談をしながら少しずつ聞きだすが、過度に聞くことはない。
・登録用紙裏のアンケート用紙への記入による。
①会話による聞き取りが中心（問診票などは用いていない）。
サポステ個人カードに沿った聞き取り
・窓口における傾聴
・ライフライン作成など
①申込受付票にいくらかの質問を兼ねたシートに記入してもらう
②インテーク面接により、客観的な個人情報（基礎データ項目・住所・家族との同居か独居か、就労希望時期など）の他、来談目的について聴き取りを行う。
③メンタルな問題が背景にあり、支援過程で取り上げざるを得ない場合は心理相談担当者が、成育歴や家族歴など深く内面に関わる聴き取りも行う。

④ケースによっては、本人の希望・同意があればアセスメントに導入することもある。
・来所時（カウンセリング前）に専任コンサルタントが現在に至るまでの状況を詳細に聞き取り、所定書面の様式に従って記入する。
相談者に対する初回インテークは一人の担当者が行うようにしています。
・マニュアルによるポイント（話し方）での収集
・各利用団体からの収集（本人承諾後）
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
相談ブースにおいて来館の目的、何で知ったのか、今の状態等を会談を通じた方法で実施
初回の相談で無理な情報収集はせずに2回3回と来館を促し信頼関係を作りながら情報収集を実施
保護者と同行で相談にこられた場合などは、まず同席した状態で過去の状況や現在の状態について話を聞くが、その後保護者と利用者本人を別の部屋で話を聞き、それぞれ情報を収集している。
本人から情報を得にくい場合でもできるだけ時間をとり、信頼関係を築いていく中で情報を得るか、別の時間に保護者から状況を伺う場合もある。
来所者には年齢・現在仕事をしているかどうか等、対象かどうかを確認し、「相談申込書」に記入してもらう。
さらに主訴は何か、ひきこもりや通院の有無、他機関の利用状況等を聴き、担当相談員を決める。（受付はキャリアコンサルタント）
1. 基礎データを連絡先まで本人に記入してもらう。
2. 学歴、職歴について差し支えない範囲で答えてもらう。
3. “今日はここでどのようなことが話せたらいいですか？”と質問する。
入塾申込書にて。
・面接の聞きとり
・参加者台帳への記入
時間をかけてヒアリング、雑談から核心へもっていく。
保護者当事者の両者がいる場合には、両者を分けてそれぞれから話を聞く。（親と一緒に場合には本音を話さないことが多いので）
ニュースタート事務局がつかっている面談シートで本人に聞く
・学歴・職歴・現在の状況・通院歴・外出の有無・友人とのつきあいなど
保護者の相談
本人が書く願書を基にした面接
履歴書に基づき、スタッフが複数で立ちあい、本人との会話、両親や家族との会話の中から情報を得ている。
過去に通院歴のある人には主治医の診断書を持参してもらう。
面談用アンケート
生育歴等
インテークでは
・年齢、性別、住所、連絡先（電話）、家族構成、資格要件の確認（1年以上ニート状態にあるか）を聞く。
・次にカウンセリングマインドで「現在はどのような様子ですか？」という問いを投げかける。
家族の方だと、普通は困った本人の状況を話し始める。「その状態はいつからですか」と尋ねる。
不登校の引きこもりだと、「中学3年からです。中学は卒業し、〇〇高校に入ったのですが、中退し…」などと答える。本人の場合は、状態を見ながら、尋ねていくことが多い。
家族構成や今までの経過など、こちらの作成した書類に簡単に書き込んでもらい、その後本人（と保護者）の話をじっくり聞く。
・面談前に簡単な調査書の提出をお願いしている。
・面談中にできるだけ突っ込んだ質問をすることによって、大体の状況を把握している。
・本人だけではなく保護者との面談での情報収集
・シートの活用
・アセスメントの活用

1. まず利用者自身から聞き取りを行う。
2. 履歴書、若者自立塾入塾願書による把握とそれに基づく質問。
3. 保護者など同伴者からの補足説明。
1対1の面接の場で、初めから聞くのではなく、本人と会話を続けていく中で、話をしてくれるまで待っている状態。 まず、当法人の行う取り組みをまず話すことで、その感想を聞いたりしながら、本人が話しやすい状況を作っている。
当法人ではインテークする職員を2名決めております。双方が過去、医療機関で専門職として実績を積んできたものです。 親子で来られた場合に3者面談では本心や要求または希望が救いきれないことも多々あります。そういった状況では、日を改めてでも本人からあるいはご家族から直接、インテークする機会を設けたりもします。
個人面談を行う。
面談時までアンケート提出
内容
・ 基本的な生活習慣
・ 病歴
・ 職歴
・ 車の免許の有無
・ 塾での目標 など
・ 調査書を保護者と本人に記入してもらう。 できるだけ話しがしやすいように保護者と本人は別々に面談をする。
1. 相談用紙に本人または保護者に記入して頂き、それをもとに面談の中で補足をしつつ情報を記入していきます。
アンケート形式
・ 面談は当初、父母から始まる。客観的にみて判断する。行動は慎んでいる。すべての個人には、すべての人生的経路がある。口答によって状況等は収集される。同時に2時間程度のカウンセリングを父母に施す。
本人及び家族面接。
現在の状況についてどう思っているのか問う。
万一本意であるのであれば、どうなりたい、どうありたいかを問う。
自分の（家族にとっては子供の）否定的感情がいつ頃、どのような環境やエピソードによって生じたのかを問う。
①健康診断書に処方薬、病歴を記入させ、詳細を聞く。
②ニートになった原因、発達障害、うつ、いじめ、不登校、中退の有無、家庭環境を聴く。
③職歴がある場合は長続きしない理由、対人関係やコミュニケーション能力レベルを確かめる。

4. 利用者の状態の見立てについて
4-2. 利用者本人の状態を見立てる際に、どのような点に留意されていますか？ 気をつけている点や着眼点があれば記述してください。
職歴や資格などの基本項目だけでなく、日常生活・家族構成・病理性などの情報を前問の要領で収集する。これにより、心身の健康面、コミュニケーション能力、集団に対する関係性の構築の仕方、性格的傾向も含めて状態を見立てている。
・初回面談および臨床心理士による見立てを合わせ判断
・言葉だけでなく表情をみる
家族歴・既往症・通院歴を参考にし、会話の中での客観性や視線や、特殊なパーソナリティがあれば留意している。また、離職理由や退学理由にも留意している。
目線、手の動きなどノンバーバルな点
・相談に来る本人は緊張し自信をなくしていることが多いので、じっくり話を聞き、励まし自信を持てるよう配慮している。
・無業の期間が長い場合には、性格によるものか、障害によるものなのか、精神的病気によるものかを判断し必要に応じ臨床心理士や専門医に相談している。
視線、話し方、様子、身なり、言葉のキャッチボールの仕方、こだわりを持っていないか、またどういふところに持っているか、文字の書き方、スピード
学校時代の好きな学科、嫌いな学科を聞く
グループワークの中でどういう振り舞いをしているかを見る
会話からだけでは見逃すものが多いので、就活セミナーや清掃ボランティア等、緊張感のあるもの、体を使うものへ誘導し、活動の様子から見立てを行うようにしている。発達障害等タイプ把握に終わらず、社会参加の可能性の模索、リファーマー先の見立て、見学同行など、可能な限りの伴走サポートを心掛けている。
過去・現在の出来事を、時系列に話すことができる。
家族関係が整理されて話すことができる。
抽象的・観念的な話題のみに終わるか、具体的事実を話すかで当事者の心の状況を把握している。
(1) 本人の挙動、表情の動き
(2) 治療中か。病名症状、薬の服用状況はどうか。
(3) 発達障害が疑われるかどうか。
・会話のかみ合い、向き合ったときの様子、自由に会話ができているか、きちんと本音を言ってもらえている感じか、などを気にします。
利用者ひとりだけからの情報ではなく、本人の許可を得て関係する機関や家族など幅広く情報を収集するようにしていきます。また一回だけ見立てをするのではなく、ゆっくりと利用者の状態の変化などを見ながら行うようにしています。
・話し方、目線、態度等から健常者としての相談者か、非健常者としての相談者なのか見立てる。
受付票がきちっと書けるかどうか、質問に答えられるかどうか、自分の考えを話せるかどうか、まっすぐ向かい合えるかどうかなど。
・身体・知的障害、精神的疾患を持っているか否か、あるとしたらどの程度か。
・現在感じている困難な点はどのようなところか。その困難な点をどのようにしたいか。
・親とも面談した場合、親との話に食い違いがないか、あればどちら側の問題かなど。
・実際の行動を起こすとしたら、本人がどんな状態になるか
・スタッフ1人ではなく、複数で確認をしながら見立てる。
①着衣の状況や話し方（声の大きさ・速度、語彙力）・視線等、全体的な様子を観察する。
②学生時や就職時の生活状況、特に保護者のみ来室の場合で、相談内容から発達障害の疑いのあるケースは、専門機関への相談歴の有無等尋ねる。
③通院中のケースは、就労時間や就労形態に関する主治医の意見（許可）を得る。
④本人が「今の状況を『いつ頃までに』『どのようにしたい』と考えることができる力」をどれくらい持っているか。また、どのように考えているか。
・複合的要因の見極め
・類型的認知に陥らないようにすること
・先入観にとらわれることなく、本人の自己決定による取り組みを重要視する。

①問題の背景に疾患・障害がある可能性がないかどうか。あったとしても、それを本人や家族がどう受け止めているかを慎重に見極める。
②生活基盤（経済的な基盤や家族などのサポートが得られるか等）の安定・不安定。
③思い込みなど、強い認知の歪みがないかどうか。
④その問題の解決、改善や治療が優先するのか、並行支援できるのかを判断する。
・相談者の言葉はもちろん、表情、服装から爪の長さの状態までみて総合的に判断する。また、保護者と話す機会があれば本人と双方から聞いた情報をすり合わせる。
・現在の生活リズム
・過去の経過
・家族からの聞き取り
・心理カウンセラーによる見立て
相談中の話し方、態度、親の意見等を参考にしながら臨床心理士との連携により、場合によっては臨床心理士にリファーしている。
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
まず、話し合える関係づくりを築く。
その上で、原因探しや責任の追及よりも何を問題と感じ、どのような努力をしたいか、どのようなつまづきを持ってしまったかを聴く。
さらに、what's better?の有無を聴き取る。
また、必要に応じてエゴグラム、SCT、バウムテスト等の心理アセスメントを実施し、見立ての補助とする。
1. 精神的な問題があるのか？あれば慎重に話を聴く。
2. 通院中であれば、意志の診断を聞く（働いて良いのか、否か）
3. 就職活動ができるのか？休養が必要なのか、見極め。休養が必要であれば就職の話にはもっていかない。
4. 背中を押せば良い程度の人には、テクニク的なことを一緒に考えていく。
会話の内容
・教育、臨床心理、精神医療どの範疇に入るのか
・過去の生育歴、通院歴（診断・薬の情報）の確認
・これまでの経緯、今の状態となったきっかけのポイント、今も抱えている悩み、苦しみを探る
・通院・服薬の状況
・普段の様子と、興奮時・パニック時の状態（手をあげるかなど）
・自傷行為の跡があるかどうか
・成長・変化への意欲の程度
これまでの傾向として、友人関係が現在ない、または自分から切ったという人は、こもり期間が長く、立ち直るまでに時間がかかる
24時間体制のサポートにより、スタッフが細かい部分もチェックすることで、全体像が見えてくる。
表情や声、挙動。そこに病性があるかどうか。
相性が合うかどうか。
母子癒着の度合い。
・きめつけない
・親の意向
・生育歴
見立て
本人の状態像をみて、背景に何かあると感じた場合は
1. 精神的な疾患の有無
「精神科または心療内科で何か診断を受けていますか」
「投薬はありますか」
なしの場合
神経症の有無を本人の日常生活や家族との人間関係で判断する
「精神疾患」ありの場合（統合失調症・うつ病などの場合）
診断名の確認⇒主治医の診断（3ヶ月の共同生活・就労体験ができる状態なのか）⇒理事長のカウンセリング判断

「神経症」ありの場合（脅迫神経症・不安神経症）
診断名の確認⇒主治医の診断（3ヶ月の共同生活・就労体験ができる状態なのか）⇒理事長のカウンセリング判断
その他（診断名はないが、境界性人格障害や行為障害などの場合） ・理事長のカウンセリング判断
2. 反社会的行動を過去にくりかえしているか否か？ 家族や本人の言葉（過去の行動）から判断する。 施設の力量で更生できるかできないかの判断⇒理事長のカウンセリング判断
※本人及び家族が受け入れを望んでも、受け入れることができない場合は他機関や専門の医療機関の紹介をする。そして、状態が良くなれば、再度の受け入れは可能であることを伝える。ただし、自立塾の場合は公的費用を使えるのは一回のみであることも伝える。
目の焦点があっているか、ろれつが回るか。面談時の親子関係を見る。 ・受け答えの有無。視線の位置。着席時の足（爪先立ち・貧乏ゆすり）。 ・両親への言葉使い、ため息の回数。 ・呼吸の仕方（鼻での呼吸が荒い場合は投薬治療中の可能性が極めて高い。） ・目線、しぐさ等、ノンバーバル ・自動思考
1. 利用者（対象者）自信の積極性
2. 精神障害、知的障害、発達障害の病歴と現在の状況
3. 就労につなげるための課題の把握 ・目を見て話しをしているか？ ・会話が成立しているのか？ ・手などがふるえていないか？
言動（口調や声のトーン、視線や仕草など）から雰囲気全体を観察することにエネルギーを注ぐのですが、基本的には、現状の問題点を本人とご家族から聞く。状況に応じて場所を変えて個別に聞く。家族構成と、本人が家族をどのように見ているのか、あるいはどのように受け止めているのか等を聞きます。 生育歴や時代時代のエピソード。ご家族や近い関係者にも言えない胸の内を面接相談として、入塾意志や参加動機が固まるまで継続的に行っています。 現在の心の状態。心の変化が行動にも表れるので、日常生活の小さな行動にも注意しています。 ・自分を立て直そうとする意欲があるか ・精神的な病の有無
臨床心理士を入れ、心理査定のテストを3点行う（本人）。 この時に、共同生活が行えるだけの精神的な健康度合等をもてもらう。 本人のやる気と、人によっては3ヶ月を目標とせず1ヶ月単位で頑張らせる。
1. ニート期間と家族関係
2. うつや精神病的な傾向や投薬・入院の有無を確認する
3. 本人自身が入塾したいか（親の希望が多いので）どうかを確認し、入塾してどうしたいか。更に卒業後はどうしたいかを問う。
正常な会話ができるか
本人の抱えている問題が深いかどうか
意欲がどれくらいあるか
NEETへの着眼点は、そのようになった“いきさつ”を経ている。父母の姿勢を見ればおよそ推察可能である。故に父母に着眼する。本人に対する着眼点は多岐にわたり判断する。自己中心の度合い、心の病等、専門的で説明が難しい。
①精神病の疑い。入塾より治療が優先するかどうか？
②発達障害の疑い。
③神経症の疑い（不安神経症・強迫神経症）と入塾生活が治療的か、反治療的であるかどうか。
面接時により、言動から判断する。
①心理テストを行い、発達障害の有無やIQレベル、苦手な部分を把握し、支援方法をスタッフで共有する。

②必要に応じて、臨床心理士、精神科医、特別支援教育士に相談し、入塾の可否を決定する。

4. 利用者の状態の見立てについて
4-3. 貴組織の利用者の特性や特徴があれば記述してください。
直接的な就職活動の前段階の若者が多い。周囲とのコミュニケーション力など。
・中卒・高校・専門（一部大学）中退者が比較的多い
・コミュニケーション能力に欠ける（言葉・表情・文章表現ともに）
・スキルの乏しさ＝職業選択幅の狭さ
・字が下手
年齢が20代後半から30代が多く、また40代男性からの問い合わせが多い。 精神障害及び発達障害・知的障害の方の相談が一定割合存在する。
平均年齢30歳
男女比8：2
・アスペルガー症候群、高機能自閉症と判断される者が多い
・うつ病や精神病を患い専門医に通院しながら、あるいは薬を服用しながら通所している者も多い
非常にレベルが高く、コミュニケーションも高い子は比較的早く仕事を見つけ、しかも正社員になる率が高い。 軽度発達障害と見立てができる子・クリニックに通っている子などが多い。
ハローワークから来る、職務経歴書の作成を目的とするようなサポステを瞬間利用する就活派と、キャリアコンやセミナーに参加しながら、じっくりと準備を積み重ねる就活派。 この2タイプが表層で出入りを繰り返し、コアとなる部分には、発達障害、精神疾患の疑いが長期的に利用している。この後者の出口を開拓していかないと前者の居づらい場所となる危惧がある。
○引きこもり系ニートが多く、少年院出所や、保護司の世話になっている等のニートはいない。
○当事者や家族の相談で、問題を抱えている。家族間のトラブル（夫婦関係・嫁姑関係・親子関係）が現在に至っても解決されていない、と訴える相談者が多い。
○発達障害が見られる相談者は県の発達障害支援センター「RISE」に紹介している。
○各相談機関を利用して、当事者間のつながりが、サポートステーション以外に持っている相談者がみられる。
○典型的な引きこもり（歴5年・10年～以上）の当事者を持つ保護者が相談される。また保護者は希望を失っている場合が多く見られる。
○県に一箇所のサポートステーションということから、相談者の地域が広範囲である。
（1）発達障害が疑われる人…7人/40人
（2）障害者雇用支援希望者（難聴）…1人
・一つははっきり言えることは、「みんな苦しんでいる」（当たり前ですが）ことです。 割合的には ①発達障害もしくはその可能性がある人 ②「自分」を見失っている人 ③②のうち、外に出られない人（いわゆる「ひきこもり」） がだいたい同じ割合と感じます。
当方の利用者だけの特徴とはいえないかもしれませんが、利用者は以下のような方々です。 全利用者の、71%が男性であり、44%が20代男性、35%が不登校経験者、29%が引きこもり経験者、16%が精神障害の既往症のある方で、6%が発達障害の疑われる方です。 またそれらの方々の多くが、対人関係に高い不安を持っており、自己評価が低く、集団に対する不安を持っています。
・就労に関する相談機関が少ないため、特定の相談機関に不満を持った利用者が流れてくる一方、「今までどこに相談してよいかわからなかった」という相談者もいる。
・過去の職業において何らかの困難さを体験し、適応できずに心の傷になって次の職業に踏み出せない人。
・精神面での不安を抱え、とらわれて前に進めない人
・社会に出るタイミングを逃し、年齢相応の職業体験がなく、不安感が強い人。
・地域性なのか精神科へ通院することへの抵抗が強い。

・無職ということで、お金の困っている利用者が多い。
・すぐには働いたり、進学のできない利用者が多い
・外へ出るきっかけとして利用している
・本人からの相談が多い
①在学時から不登校・いじめられ経験があり、対人関係に不安のあるケース
②卒業後就職したが、バーンアウトして、3～4年療養後、再就労への意欲が出てきたケース
③在学中（思春期）にメンタル不全を発症したケース
④精神科・神経科・心療内科に通院中のケース
（現時点では数的実績としてはまとまっていないが）いわゆるヤンキー型を視野に入れた支援
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
①男女比 75：25
②最多年齢層 25～29才（20～24、30～34が続く）
③大卒30% 高卒18%
④就労経験ありが60%（うち、70%がアルバイト）
⑤相談者比 本人：親 3：1
⑥純粹ひきこもり（の家族）は少ない
・現在状況として30歳前後の利用者が過半数になっています。 また、特徴として4年生大学卒業、中退者が多く、職業にも2年程度就いている様子です。
・男女の比率は9：1の割合です。
他人との関わり時にコミュニケーション能力の不足な人
自分のやりたい仕事と仕事能力のギャップの大きい人
仕事と社会や企業の求める人材とのギャップの大きい人
通院中でやや病的な来所者・発達障害と思われる若者
全体的に今の自分の状態から抜け出して前に進みたいという気持ちを強く持っているが、ほとんどの方が自分に自信を持っていない。方法が分からなかったり、方法が分かってても周りに相談する相手がいないため不安が先にきて進めなかったりしている。 また利用者の多くの方がハローワークには行った経験はあるが、検索のみの利用が多く、相談窓口の敷居が高いイメージを持っている。
心療内科、神経科に通院している利用者が半数近くいる。また、軽度発達障害の特徴を有すると思われる、社会への適合に苦しんでいる利用者も多い。 支援対象者自身の来所が8割に及ぶが、社会に出ようとする意志がありながら上記の理由により活動をSTOPせざるを得ない状況にある利用者が目立つ。
1. いじめによる不登校、ひきこもり、対人恐怖症が多い。
2. 発達障害者が多い。
3. 保護者の相談が半数を占める。
4. 自信がない人。
5. ブランクをどのように埋めれば（表現すれば）よいのか悩んでいる。
十把一絡げに見ていないです。
・軽度発達障害 30～40%
・不登校経験者 80%ぐらい
・長期間（5～15年）引きこもり状態であった人が多い
・男性が9割
・友達がひとりもおらず、社会的にも孤立している人が多い
・保護者との関係でトラブルを抱えている人も多い
ニュースタート関連の本の出版などで知った人が多く、北海道や関西など遠隔地からの問い合わせ、申し込みが多い。
様々なタイプの若年者が利用
引きこもり系の人。
自分の考えに固執するタイプ
歳の割りに幼いタイプ
対人関係が苦手な神経過敏な人
・バリエーションのあるメニュー
・他団体との連携

・ 20年の経験
塾生の平均年齢が30歳近くである。
不登校から長いひきこもりの経験者が一度社会に出たが、何らかの理由で会社等を退職し、ひきこもり状態にあったものが多い。
人間関係は苦手だがまじめな人が多い
境界型だが、神経症や軽度発達障害を持っている人もいる。
先輩の塾生が後輩の塾生の生活指導が自然にできるように指導している。
特になと思う
・ 16歳から30歳までの幅広い年齢層。
・ 長期ひきこもり経験者がほとんど。
・ 個人としてどうしたらよいかわからない若年者が塾参加によって「就労のきっかけ」を持ち、自信を回復する人材
・ 目的をあくまで就労におく人材
・ 精神疾患の方ではない方
1. 20代半ば～30代後半までの利用者が多い。
2. 心療内科にかかった経験者が多い。
※特性については個々様々。
就職氷河期といわれた28才～32才までの年齢層の塾生、精神疾患を持っている塾生、精神疾患ではないが、コミュニケーションであったり、その他を含め、精神疾患に近いものであったり、すぐに就職へ結びつきにくいもの
精神科受診歴や通院歴のある方が、他団体よりも多くいらっしゃるかと思います。また、紹介先や当法人の自立塾事業を知った機関が、保健所や社会福祉協議会から各市町村や区町に派遣されている、民生委員または福祉委員といったケースが多いかもしれません。
・ 自己評価が低い
・ 積極性や行動力がみられない
・ 体験・経験が少なく、社会性に欠けている
精神科との連携が必要な方が半数近くいる
自分がこの先どう進んでいったらいいのか不安になり、イライラしたり落ち込んだり悩みをもった子が多い。
比較的、学力的にもしっかりしており、まじめでおとなしく家庭が経済的にも安定している。
1. 他県が大半
2. ニートと呼ぶより引きこもりが80%
コミュニケーションが下手
特に他と変わるところはない。ただ、若者の人生的関与に対する情熱は教育産業者の自立塾とは一線を引くものであり、家庭すべてのしがらみから教育のメスを入れるもので、それが特徴かもしれない利用者が多い。
①いじめ、不登校、中退、虐待等の経験者が多い。
②女性スタッフが3名いるためか、女性の申込が多い。
③昨年秋から、発達障害、うつ、統合失調症、依存症が増えている。

<p>5. 親、保護者に対する支援について 利用者の親、保護者に対してどのような支援サービスを行っていますか？</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・申し込みがあれば保護者との個人面談に応じている。本人同伴で来所した場合には親と本人と場所を移してそれぞれ相談員が対応。 ・高等学校にて保護者セミナーを実施。我が子の進路決定の際の親の関わり方など。 ・保護者の集まりを開催 1回10人程度、少人数制の勉強会 会の終了後は個別面談の時間を設ける ・随時面談受付 ・月3回「保護者セミナー」の開催（内2回は県内各地での開催） ・週3回保護者相談日 ・必要に応じ相談者の変容を伝え、家庭での必要な支援も依頼し連携を図っている。 ・保護者の研修機会を設け、相互の意志の疎通を図り、更に連携を深められるよう進めている。 ・親ゼミを毎月1回 ・親相談 毎月の親セミナー（個別相談を含む）と、随時保護者相談を受け付けている。一定の条件が整えば、訪問サポートも行っている。 * ニート・引きこもり者の親御さん向けセミナー 「ニート・引きこもり者への理解と対応～どうすれば当事者が元気になるか～」 を毎月第4水曜日；6：30～9：00 pm * 保護者しゃべり場 ニート・引きこもり者の親御さんが集まりおしゃべりをする 第1・3・5水曜日；4：00～6：00 pm 親御さんや家族の方にもつらい気持ちをカウンセリングする（継続はしない。1・2回のカウンセリングで気持ちの整理が付き保護者しゃべり場につながる。あるいは他の相談機関を紹介する） （1）親相談は随時対応している （2）家族相談会を月1回実施している。 ・NPOと連携した保護者説明会の開催（2回） 「親のためのセミナー」「親への面談」などを行っている。 ・家族療法をベースとした相談業務、各機関の情報提供、社会情勢への理解を促し、本人のみを責めないよう働きかけている。 ・「家族支援学習会」をシリーズ開催し、雇用情勢、若者自立塾に代表される若者就労支援の流れ、企業人事担当者の話、職業訓練の話、また、医師からの話題提供により体系的な理解を促している。 ・一人で抱え込まず、いろいろな人の力を借りるよう、心の負担を少しでも軽くするよう促す。 ・親向けのセミナーの実施 ・親と話をするため（親のカウンセリング）の専属相談員の配置（60代・男性） ・親の会の実施 ①保護者向けセミナー「若者の気持ちを理解するための傾聴トレーニング講座」毎月1回開催 ②若者の就労問題に関心をもっている人（年齢問わず）の出会いの場として、「サポステさろん」を毎月1回開催 ③「若者の就労を考える親向けセミナー」の案内 ④毎月のサポートステーションのセミナー・イベント情報の案内 保護者に対するセミナー 保護者からの相談 保護者交流会（予定） ・保護者向け専門相談を、若者の居場所事業に取り組む青少年活動センター内に開設している。 ・保護者交流会「親こころ塾」の開催（ミニ講座や親の心理的自立をうながすプログラム） ・ニート・ひきこもり経験のある若者と親世代の交流会の実施（3月実施検討中） ①個別相談

②保護者対象講座の開催
講座名「若者の心の理解と“育て上げ”への配慮」など
・臨床心理士、心理カウンセラーによるメンタルケア。
・少人数（6～8名）の保護者による2回シリーズのセミナーを開催する。 「わが子の就活サポート、親の役割を考える」～家族心理学の視点から～
・月1回の報告会（個別）面談を行っています。
・電話による支援相談、日々の相談は随時行っています。
・セミナー等の参加（本人の参加している）で実際に体験してもらいます。
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
サポステ主催としては「保護者対象セミナー」を実施している。また、引きこもりや不登校の保護者の会等とのネットワークを利用して情報提供を行っている。
保護者も対象者と同様に個別に相談を受けている。 セミナーや相談を通して親子関係の再構築の支援を行っており、問題の深い親子に関しては、別々の時間枠を取り対応している。 保護者対象セミナーでは、親子関係を一緒に見直す「親子ふれあい心理講座」を実施している。
また、「軽度発達障害者の特徴を持つ若者への理解と支援」のセミナーを月1回実施し、親、保護者、支援者への理解をうながしている。
1. 20代半ば～30代後半までの利用者が多い。月に保護者セミナーを連続3回シリーズで支援する
2. 保護者会（交流会）の定期開催
保護者会、電話連絡、手紙、二者三者面談による話し合いなど。
メール・電話で状況説明
・定期的に保護者会、勉強会の開催
・自立塾新聞を作成し、近況を報告
・トラブル・悩みの内容が保護者との関係である場合にはかなりの程度ふみこむこともある
・卒塾後も電話等でのフォローアップ
期間中、卒塾後も電話による報告、相談が中心
各地の講演会などの会場で会うことも多い
随時、個別相談を受けている。
保護者の希望とは別に現実的な問題も理解してもらえよう努めている。
・個別面談
・いつでも自由に来ることのできるフリースペースの運営
・親の会、家族の会の実施
・訪問支援
随時面談
メール・レター
親の交流会 他
主にカウンセリングなどの相談活動
通信の発行
2ヶ月に1度、父母研修会を1泊2日で催している。
父母だけでなく教員、農業従事者、児関係者などを招き話をしてもらっている。
・担当者による丁寧な連絡体制を整えることにより、現在の状況をご家族にも把握してもらことによって、学園・家庭間の信頼関係を深めている。
・月に一度「保護者学習会」を開き、原則両親出席を義務付けている。今のところ100%の出席率で、講師を招いての開催が継続できている。
・家族に対するカウンセリングサポートも希望者には行っている。
・シンポジウムでの情報提供
・個別の保護者対象カウンセリング
1. 若者自立塾利用期間中の勉強会（月1回、計3回）
①コミュニケーションスキル
②親、保護者に持ってほしいカウンセリングマインド
③利用者の就労への方策提示
2. 利用期間終了後の交流会（3ヶ月に1回）
・保護者会の開催

・定期的な連絡
・勉強会
定期的な個別面談を基本としています。今のところは家族会を組織しておりません。具体的な家族からのニーズがあれば、将来的には考えて生きたいと思っています。
月に一度、保護者・家族の会を開催。三者懇談
親子勉強会での講演
・子供との接し方（修了後）を勉強してもらう（コーチングセミナー受講）
・定期的に画像をプリントして送っている（変化を見せる）
・その子の伸びるポイントを伝える。また、落ち込むポイントも伝え、ここがポイントということだけでも知ってもらい、気をつけてもらう（主に母親に）。
1. 入塾中に（最低月1度）保護者も共に生活体験して頂く
2. 保護者のカウンセリングを行う
3. 退塾後（中途退塾）は電話等で状況を聞き、電話カウンセリング対応を行っている
保護者の会
電話によるサポート
・月に一度、保護者会を設けている。彼らの要望により増やすことを考えている。
・就職後支援の一環としての連携、二度と教育を間違わないように指導していく。
<入塾時>
ニート状態に至った原因について、単に本人のやる気のなさではなく、悪循環にあることについてできるだけ科学的に理解すること、確認しあうことについて面接する。
<入塾中>
鹿児島県内及び近県（宮崎・熊本・福岡）については月1回会場を設定し協議の場をもっている。
その他電話相談等。
<卒塾後>
随時の相談に対応。
①入塾者の保護者にはスタッフだけでなく、臨床心理士や医師の意見も加えて定期的に状況報告する。
②修了が近づくと、本人の仕事への取り組みや適正、家庭症に戻った場合の対応方法等を伝える。
③入塾が無理な場合は、受け入れ可能な施設の紹介と、家庭での対応方法を伝える。

6. 支援プログラムについて
6-1. 貴組織の支援プログラムの特色はなんですか？
グループワーク・青年相互の関わり。ロビーにおいては仕事帰りの若者との接点が生まれることもあり、そこからさまざまな気付きを引き出す。 ワーカーズファームというプログラムでは、午前中はグループで調理体験、午後はトレーニングプログラムを行っている。
・ボランティア体験による意識・意欲アッププログラム ・作業体験を中心としたグループワーク
①臨床心理士が、決まっている曜日に週3日の相談に対応している。
②若者就職支援センターのプログラムを使用。特にインターンシップを活用している。
③学校と連携し、ニート予防として、学校へ出張相談を実施。
④若者自立支援をしているNPO団体へ出張相談を実施。
グループワークを主軸とした、コミュニケーション力の向上
・コミュニケーションプログラム 通所している者同士の間関係づくりや話し方の指導を行っている
・職場体験、職場見学：様々な業種を選んで企業に依頼している
・パソコン教室：個のスキルにあったプログラムを実施している
・就職基礎能力養成講座の受講を勧めたりハローワークの説明会に参加させたりしている
・面接試験の受け方、履歴書作成の仕方、敬語の使い方、電話の応対等を一連の流れの中で実施している
・福祉施設、カフェ、工場、企業、教育施設など様々な分野のジョブトレを用意
・動き出す前の「スタートライン・セミナー」として「声出しセミナー」、「メイク講座」、「男性のカッコ良くなるうセミナー」、「歩き方セミナー」などを行っている
*スタートライン・セミナー⇒就活の前にまず社会に出る為に自信を付けてもらう、基本的なものを身につけてもらうセミナー
主に4-3の就活派を対象とした、就活セミナーと、発達障害、精神疾患の疑いのあるもの、または長期停滞者のコミュニケーションスキル・アップを目的としたセミナーの開催。これは見立てとしての機能を持たせている。その他、様々な人生モデルとの出会いの場である職業人セミナーや商店街清掃等ボランティア活動。 また、アウトリーチを地域ぐるみで行えるよう民生委員等への働きかけ、訪問活動を行い、発見>誘導>参加までシステムをもっている。
キャリア・コンサルタントとカウンセラーが多様な悩みを受け止める。またソーシャルワーカーが支援対象者の生活の場での支援も実施できる。 支援対象者だけでなく、その保護者向けにも相談支援を行う。 当事者のカウンセリングから、個々にあったセミナーや居場所等の情報を提供する。
自立訓練「勤トレ」：3か月以内での修了を目標とする。
(1) 目的：規則正しい生活リズムを身につける。コミュニケーションに慣れる。
(2) Aコース：訓練日時：毎週月～金（祝日除く）8：30～13：00（昼食含む） 訓練内容：朝礼、発声、会話・応対練習、一般常識学習、振り返り、昼食雑談、終礼
(3) B・Cコース：訓練日時：毎週月～金（祝日除く）8：30～17：00 訓練内容：朝礼、（セミナー、ボランティア活動、職場体験、個別メニュー）、終礼
(4) 修了条件：自信がついて、本人が修了を希望した場合。就職活動が自らできるようになった場合。
①保護者セミナーを、ニート・引きこもり支援に先駆的に取り組んでいる。NPOと共催。
②支援ネットワークを構成しているNPOは、日帰りでニート等の自立のための活動（ジョブトレ・県補助あり）を実施しており、相談窓口でジョブトレが必要と判断した若者を誘導している。

福祉施設での労働体験と、グループワークでのソーシャルスキルトレーニング、フリースペース（サポステカフェ）で自立的に仲間作りなどを行う。
・個別カウンセリングとグループ活動を組み合わせ、考え方と行動面の双方でサポートできるようにしている。 グループ活動はジョブトライアル「青少年センターでの庭園清掃作業」、リラックステキ体操教室、ビジネスマナー学習会、座談会など。
・他の機関と連携して、必要があればリファーしていく「発達障害、精神疾患、職業紹介など」
・他の施設での就労体験
・キャリアコンサルタントと臨床心理士の連携を密にし、利用者の負担を減らし、役割分担して対応している。
・相談を受け、居場所へ通所し、ジョブトレーニングを受ける施設も併設していること。
①就労支援研究会の構成組織と連携を取り、継続した支援を行っている。 （こころの健康センター、自閉症・発達障害支援センター、教育委員会、NPO、市民活動センター等）
②「若年無業者就労支援プログラム（県からNPOが受託）」と連携している。
③セミナーのラインナップ 保護者向け－傾聴トレーニング講座 若者向け－自己理解、コミュニケーション力向上（対人関係）、利用者同士の交流・グループワーク（人間関係）、就労意欲向上
①少年センター（少年補導センター）との連携
②私のしごと館への訪問（職業体験） 心理面の課題を有するものが多いため、セミナーで「あがり症」をテーマにしたリ、合宿事業も内容面を軽作業を通して自己のふりかえりを重視するなど、本人、保護者ともに対し、メンタルサポートとして、自身の気づきと安定に主眼を置いている。
①カウンセラーによるキャリアを主とする個別相談
②臨床心理士等による個別心理相談
*「若者就労自立支援センター（ニートサポートクラブ）との連携で実施できる
*スーパービジョン体制がある
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
④職業訓練校見学
*JOBカフェOSAKA、公共機関、関係団体と協力関係にある
⑤グループ体験プログラム
*対象は、カウンセリング継続利用者のうち、プログラム参加の必然性がある人
*期間限定で開催しており、連続的な「居場所」にはしていない
*コミュニケーショントレーニングに焦点をあてている
*全8回で、それぞれ3時間のうち1.5時間はテーマにそった講師を招きセミナーを実施
・当法人が管理運営する神戸市教育キャンプ場を利用して、小学生3～6年生を対象にした野外活動（キャンプ）にリーダーとして参加する。
・ボイストレーニング、フリートーク、社会交流体験プログラムあたりが特色です。
・広い地域性に対応するため3カ所の勤労青少年ホームを利用した相談イベントの実施
・フリースペースでのたまり場的自由な交流の場の提供
・職場見学、作業体験の実施
特に就労支援の面で職業理解や職業体験などグループで持っているリソースを活用している。できるだけ決まった定型のものではなく、利用者本人と共に希望を組み立てていくプログラムを考えている。
就活や就職に直接結びつくようなプログラムはジョブカフェを利用しそれ以前の活動をうながす支援プログラムを組んでいる。 保護者対象のものは、親子関係の再構築、支援対象者の理解をうながすようなプログラムを実施している。
1. 臨床心理士による週一回のグループ・カウンセリングの実施
地域密着の就労体験

・生活創造
・自然体験
・人間関係トレーニング（体験学習法）P A ・ラボトリーメソッド
・慣れる→体験する→挑戦するの段階的、発展的プログラム提供
・バラエティーに富んだプログラム
・グループ・仲間づくり、協力を重視
・地域のおじさん・おばさんなど普通の大人との交流。学び
・継続する力、集中する力を重視
・ボランティア活動等、社会貢献の機会をもつ
・前半・後半の活動場所が違う（甲府・市川）
また時期により四国お遍路にも参加
・スタッフ自身にひきこもり経験者がいる
利用者の特質をふまえて、段階的にステップアップできるよう作業内容、活動内容を変えている。
人が育つための要素は全て生活の中に含まれているという考えに立ち、生活訓練を主体とした支援を行っている。生活リズムを整えることで元気を取り戻し、朝きちんと起きて三度の食事をきちんととり、しっかりと体を動かすことで自分の時間を自由にコントロールできるように取り組む。
カリキュラムの豊富さ
企業とのつながり
自営店舗での研修
1段階は心技体の一致 心…こころの安定は生活の安定にある 技…社会人になるためのマナーを身につける 体…8時間働ける体力をつける
2段階は様々な就労体験…経験から働く自信を獲得する＝就労先との塾生の状態に応じた細かい連携が大切 漁業・農業・サービス業・工場労働・CAD研修など様々なプログラムを用意する
3段階は就職活動の支援…ヤングジョブ・ハローワークなどを使い塾生とともにスタッフが就職活動の支援、就労体験先に就職したケースもある
4段階は終了後の支援…スタッフのボランティア精神あふれる活動・就職活動・相談活動・WEB支援
・農業が主
・地域の行事に参加する
・他団体との交流
・生活訓練においては、基本的に当番制を中心におき、集団の中の個としての「責任感」を身につけることによって、「遅刻」「当番の放棄」「怠動」などはほとんど見られない。食事も全て塾生によって作られている。
・午前中の学習活動は、様々な可能性を模索する時間であり、ただ学習をこなすのではなく、月末に行われる「自分の授業」までに目標に到達させるための努力をする時間となっている。
・午後の「創作活動」ではさまざまな創作体験を通して、コミュニケーション力を向上させる機会となっている。
・ジョブタイムは「体験」ではなく、確実に賃金が発生する共同作業である。月末には塾生にも賃金が支給される。
就労を第一に考えたプログラム
1. キャリア・コンサルタント常駐による日常的なコンサルティングの実施
2. 学習に自由に使えるパソコンを複数設置
3. 若年者就職基礎能力支援事業（YESプログラム）の実施
4. 継続的な労働体験
5. 就職準備活動
・仲間づくりを中心としたプログラム
・コミュニケーションを通して、皆で1つのものを作りあげていくプログラム
・演劇、太鼓、スポーツなど
3. 県内の各市役所、ハローワーク、自立塾等への直接訪問での働きかけを実施中。

資格取得・特別プログラム ・パソコン検定 ・YES-プログラム ・危険物取扱者資格
特別プログラムとして ・造形 ・ドッグシッター ・陶芸講習 ・少林寺拳法
1) 知的障害者との共働
2) 多彩な特別プログラム 最初には体づくり、仲間づくりを自然の中で、地元の方に協力してもらい行っていく。 次の段階では役割分担により個人の責任感を育てる。大変だが楽しい。後に残る達成感。
1. 朝5時起床、坐禅
4. 県、自治体の担当部局との連携（広報誌への掲載、ポスティング、人の紹介など）労働局との連携
3. 自給自足を通して無農薬野菜を調理し「食」の教育
4. ホームヘルパー資格の取得を勧めている（将来は高齢者を受け入れての中間施設として卒業後に実体験を経て就業につなげる）
ホメオストレッチ
進学に向けての特別プログラムがある
自然セラピー 重点的に精神力の強化である。人生を語り人生の意義、そして働く意味を教え実践的プログラムとしている。
①就労体験（グループ就労アルバイト）
②グループワーク S. S. T. 生活技能訓練 毎日のプログラム開始時・終了時のミーティング
①入塾当初のプログラムが充実していること。 コミュニケーション力、SST、ライフリテラシー、体力を身に付けるためのコーチング
②自分を知り、仕事を知り、職種を知るための「自分の一歩」
③適職につくため、約30種類の職業プログラムを用意し、職業講話、職場見学からインターンシップに結びつける。

6. 支援プログラムについて
6-2. その支援プログラムのどのような点が効果的ですか？
同世代で「普通に」働いている若者との日常会話から刺激を得られる点。 調理体験では、周囲との連携・協力・役割分担が無意識のうちに身に付く。
・体験したことのないことを体験する。今までに接したことのない年齢層と接することで、新たな「気付き」を与えられる。
・職業選択の可能性を広げることができる
①相談者の安心感や信頼感を得ることができる
②職業観の育成、体力づくり、生活訓練
自己肯定感の増大
コミュニケーション力のアップ
参加者同士のピアグループの形成
・同世代の若者達の横の人間関係が自然に行われている。
・就業を目的にしたプログラム作りであるため相談者自身が今どの段階にいてこの先どうしていくのか光が見える状況で通所できている。
様々なジョブトレ分野を用意しており、それを通して仕事を選択しやすくなる。 福祉のジョブトレに行った子は実際に福祉の仕事に就き、企業のジョブトレに行った子は、ジョブトレ先の企業で研修を受けている。 「スタートライン・セミナー」でそれまでメイクをしなく、外に出なかった女性がメイクをすることを楽しいと感じ、外に出るようになった。声を出さない子が話すようになった。
セミナーは孤立した就活にゆるやかなネットワークを持たせ、就労後の定着励ましあいサポートになっている。 訪問は情報が届かない、または届いても動き出せない若者の誘導に成功している。
各種セミナーに参加後実践につながっている。(就労やコミュニケーションのとり方など) コンサルタントやカウンセラーの相談から、今までの自分に気づき、問題が整理され次のステップに進んでいく。 当事者向けセミナーや居場所、保護者の居場所やセミナーに参加した家族に両面からサポートできる。
(1) 最長3か月連続して、一般就労者と同程度の生活サイクルを体験できる。
(2) コミュニケーションの実体験ができる。
(3) 職場の規律、ルールを守ることが重要であることを理解できる。
①サポステ単独で開催するよりは集客できると考えられ、また、参加する保護者もサポステの支援サービスのPRだけでなく、他の支援機関の支援内容も併せて知っていただけのもとなっている。
②約半年間の生活訓練やボランティア活動を通して、ほとんどがアルバイトできる状態まで回復している。
福祉施設での労働体験 ・直接就労に結びつくのが困難と思われる方は、その準備段階として知的障害者の作業所などで労働訓練を受けて、作業に慣れたり人間関係を身につける。 ・勤労意欲が低い方や人間関係に不安を持つ方は、認知症の方の施設でお年寄りと接する経験をして、労働に対する意欲を高めたり、人間関係について学ぶことができる。
グループワーク ・今まで良好な人間関係を持ってこなかった方や、人間関係について不安を抱える方を対象に集団で行う活動(グループワーク)を実施。ゲームやソーシャルスキルトレーニングなどを実施することで、人間関係を学ぶ機会としている。その中で、情報交換や、切磋琢磨があり、就労に結びついている。
・グループ活動を組み合わせることで、集団の中での自己について考え、実践する機会を作っている。社会へ出る前のトレーニングとして考えている。
・青少年センターでの就労体験では、サポステスタッフと顔の見える関係で、利用者も抵抗少なく入っていけるし、スタッフもモニターしやすい。そこをステップに他の組織でのアルバイトにつなげている。
・体操教室、ビジネスマナー学習会などは、高難度とせず達成感が得られ自信につながるよう配慮している。個別相談でフォローできない利用者もフォローできる。

<p>・家族支援学習会は、シリーズ構成とし体系的に理解できるようにした。関係者にも参加を促し、援助の参考としてもらっている。顔の見える連携が可能となりより密度の高い支援が可能である。</p>
<p>居場所のスタッフが自立支援施設での様子をすぐに見ることができ、すぐに対処できる。</p>
<p>①セミナーに参加して、自己理解や対人関係。人間関係のトレーニングをし、働くことに関する自分の気持ちを整理した後、「若年無業者就労体験プログラム」に参加するというステップが明確である。</p>
<p>②他専門機関へのリファーもスムーズである（顔の見える連携が構築されている）。</p>
<p>①サポステでは通常あまり対象とされない、いわゆるヤンキー型ニートへの支援ができる。</p>
<p>②既存の優れた行政資源を活用して支援を行う点。</p>
<p>・対人関係における安定と広い視野に立った自身の将来展望を立てられることや、自己肯定感を増すことにつながる。（自己否定の軽減）</p>
<p>*社会参加にブランクのあった若者が、カウンセラーとの関係性を築くことができるようになり、次のステップとしてグループに参加し、集団の場に慣れ、コミュニケーショントレーニングを経て、安心して自己表現したり、社会に出て行くための準備が身につく。相互に触発しあうことで、職業観や雇用情勢への関心が生まれた。</p>
<p>・子どもたちとのふれあいを通して、コミュニケーションの必要性を再認識する。</p>
<p>・ボイストレーニング 声を出すこと。腹筋を使うこと。表情を豊かにすること。姿勢を正しくすること。</p>
<p>・フリートーク 同じ悩み、同じ思いを持った同世代の若者がテーブルトークを自由にすることで、連帯感・仲間意識の向上・自己の存在アピール・発言でのレベルアップ・周りに対しての気遣い・気配りのトレーニング</p>
<p>・交流体験プログラム 趣味を中心にスポーツ等の体験、実社会との参加、コミュニケーション向上</p>
<p>・無口で他人とは話をしなかった若者が仲間意識がイベントや見学・体験を通じて出てきて、若者同士やスタッフとの会話ができるようになってきた。</p>
<p>職業理解の面では特に対応している業界が偏ることなく、実際の現場を経験している方の情報を得ることができ、利用者にとっては他分野にわたり具体的なイメージを持ちやすい。</p>
<p>若者に対するPC個別指導や書き方講座は、技術習得以上に家から目的を持って外に出ることや他人との会話を行う点においてきわめて効果的である。</p>
<p>話し方講座、アサーショントレーニング、ワークショップ、職場体験はあらゆる活動に対しての意欲増進に効果的である。</p>
<p>保護者対象のものは、親が理解することで支援対象者の若者がしがらみから解放され自立につながった例がいくつかある。</p>
<p>1. コミュニケーション・スキルが徐々にあがってきている。</p>
<p>・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。</p>
<p>体験を通じて気がつくことが多い</p>
<p>・段階的プログラム→着実に力をつける、受身から主体的に</p>
<p>・多彩なプログラム→本人の興味、考えを生かす、思い、自信を高める</p>
<p>・グループ活動→支えあう、思いやる心を育てる、人・自分への信頼を高める</p>
<p>・地域との交流→プロではない人の教育力、自然な学び</p>
<p>・継続・集中→働き始めた後の継続力</p>
<p>甲府での少人数で始まるコミュニケーション、市川には約100人のニュースタート入寮生との共同生活・活動で人との輪が広がる。またお遍路では小学校との交流会など外部との付き合いもある。</p>
<p>利用者が自分のマイナス要素を気づける。それを指摘し適切なサポートが組めるように利用者をスタッフが相談する素材となる。</p>
<p>生活の様々な場面に出くわして、その状況をクリアしていくことで問題解決力や変化に即応する力をつける。</p>
<p>また、多様な人々と交わり、関係性を持つことにより、社会性や協調性、自発性を身につけていく。</p>
<p>自営店舗での研修</p>

<p>その人それぞれに応じた理解が可能で、その人の段階がわかるのでスタッフ及びOB塾生や先輩塾生の自然な親身あふれる指導が可能である。(グループ・ダイナミックスの活用)</p>
<p>自然のサイクルと合致しているところ</p>
<p>陽にあたり、大地に触れ、汗を流せるところ</p>
<p>食物を作っているという実感 など</p>
<p>・訓練というよりは「教育」であり「共育」である点が、基本的な「思考傾向」を改善していく大きな要因となっている。「今のお前は駄目だから、訓練で変えていこう」ではなく「今のお前もそれでいい。更に前に進もう」的な指導により、少しずつ自信を取り戻し、集団の中での役割を見つけていけるようになる。</p>
<p>・まずは様々なゆとりのある活動を通して、スタッフと塾生間の「信頼」を深めることにより、規則を作ることなく、安定した生活が送れるようになっている。管理及び強制的な指導は、一時的には効果があるかもしれないが、それは長続きしない。5年後、10年後を見越したサポートが必要だということが良くわかる。</p>
<p>・ジョブタイムによって久し振りに賃金を手に入れた者、更には初めて労働によって賃金を手に入れた者。その経験は大きな転機を生む。「自分にも働けるかもしれない」という自信を「安心できる環境においての労働」によって手に入れることができるからだである。</p>
<p>支援スタッフが全員キャリアカウンセラー。個別のカウンセリングも多く取り入れる。</p>
<p>1. 自己理解、自己分析の促進</p>
<p>2. 資格取得による自己効力感の獲得</p>
<p>3. 職業観の涵養</p>
<p>・皆で作りに上げることでコミュニケーションを自然ととるようになる。 1人ではできないが、皆でやるからこそある達成感がある。</p>
<p>介護職や福祉施設への進路希望の声を聞きます。このように自分の将来や就労の道を福祉の世界と考える方が多くいるのも効果的と思うのですが、何よりも障害者や高齢者との関わりを通して、「こんな自分でも役に立つことがある」や「必要とされた」等の体験をされているようです。こういったことが自信の回復と価値観の構築につながっているように思われます。</p>
<p>資格を取得することによって自分自身への自信が身につく。</p>
<p>1) マイペースで労働に体をならすことができる 障害者が働く姿を見て、自活の必要を感じる</p>
<p>2) 色々な分野の人の話が聞ける 仲間と共に汗を流す喜びを感じる(スポーツ、奉仕作業)</p>
<p>体力がついてくると、途中で諦めるということが少なくなって気力も同じくついてきた。労働体験での職場実習も弱音をはく子はほとんどいなかった。仲間と助け合うにはまず、自分の仕事を責任を持ってやるということという意識が出てきた。</p>
<p>1. 朝5時起床</p>
<p>2. 坐禅</p>
<p>3. 農作業</p>
<p>4. 野外炊飯</p>
<p>5. 卒塾前の四国遍路体験(野営で自炊)</p>
<p>進学希望者には個別に対応できる</p>
<p>考え方が前向きになり、やる気がでる</p>
<p>効果は絶大である。他の組織によるものとは異色である当自立塾のプログラムは、教える者がその修練の中でつちかったものである。</p>
<p>①働く、賃金を得るという実践的活動であり、自分が社会に通用しないのではという、漠然とした不安を払拭することになる。</p>
<p>②肯定的に評価されることによって自尊感情が育まれる。</p>
<p>対人交流への不安が解消され、スムーズになる。</p>
<p>①コーチングにより、過去に決別し、自信をつけ、将来目標を設定し、各自の方向性を見出すことに有効である。</p>
<p>②「自分の一歩」により、自分の興味や適性にあった一歩を踏み出すきっかけになる。</p>
<p>③幅広い就業プログラムから体験を通じて絞り込み、仕事に近づくのに有効。</p>

6. 支援プログラムについて
6-3. 貴組織では現在行われていないが、効果的だと思われる支援にはどのようなものがあると思われますか？
合同宿泊体験
家庭への訪問
コミュニケーション訓練などのグループワーク
インターンシップ前後の訓練 （長期の面接が必要な人や発達障害が見受けられる人、また手先が不器用な人など、ある程度の訓練をしたうえでインターンシップに望むことが必要だと思われる。そうしなければ、インターンシップが失敗体験となり不安を増すものになる可能性がある。また、インターンシップ後のフォローをし、効果的な就労へとつなげられると考えられている。
・相談者や相談者の保護者に対し、元ニートによる自立への体験談を話してもらう。
訪問
システム・エンジニア等PCスキル獲得を目的とした企業の新人研修システムへの参加、または同プログラムの実施。できの良い利用者は雇用してもらう。
当事者間で、サポートステーションから外へ出かけ、季節の移ろいや社会の出来事に関心を持ってもらえるようにする。（寒梅会・さくら見物）
当事者に就労体験してもらう。（ボランティアではない）就労にサポートできるシステムづくり。（自立塾とは異なる）
（1）自立塾入所期間が原則3か月となっているが、もっと長期間にする。
（2）各種職業能力開発機関に新たにニート（自立塾修了者で未就職者等）コースを設定してもらい、そこへ誘導する。
・ニート等の受け皿となる企業等の開拓
・ニート等のインターンシップ（職場体験）
・現在、親に対するセミナーを計画中であるが、親子が一緒に参加でき、関係を再構築できるようなセミナーがあったら効果的であると思います。
・就労まで結びつきにくい利用者には、当方にて何か就労までのスモールステップになるような労働体験（いくらかの報酬を得ることができる労働）ができないものかと考えている。
・費用などの点から実行に移せる可能性は少ないかもしれないが、フリースペースを発展させた形として、喫茶店のような形態の場所はできないものかと考えている。利用者はその場所に来る人でもあり、運営スタッフとしても参加できるのではないかと考えている。
・親座談会 学習会シリーズ終了後実施予定。
・パソコン教室 30代だと学生時代はパソコン普及前であり、簡単な用語も知らず一般のパソコン教室に行ってもついていけない懸念がある。経済的にも厳しいため無料のパソコン教室の需要があると思われる。
・県内各地での巡回相談
・ニート予防に向け学校等での早期支援の必要性を周知していく。
訪問によるアウトリーチ
①心理テストの実施 多面的な自己理解のため、心理テスト技術者等に依頼し、アセスメントしてもらう。 実施するテストバッテリーはYG・TEG・職業レディネステスト・GATB等
・社会見学（職場見学の前段階）
・メール相談
・中高年求職者と若年者の交流（計画しているが難航）
・訪問相談（各人の家まで行くのは現時点では難しい）
・ネットワークを生かした職業体験プログラムの実施やジョブコーチによる支援プログラムがあればと考える。
①就労自立訓練 就活スキルだけでなく、社会生活能力を身につけ、エンプロイアビリティを高めるための連続ワークショップ
②企業での就労研修
③保護者対象のワークショップ
・JOBトライやる！ さまざまな職業を実際に体験して、職業選択の手段とする。

<p>・あらゆる悩み・相談に対応できる「サポステ・コンシェルジュ」を設置して開所時間内は常時対応できる体制を整える。</p>
<p>中学高校生活において自立への体験や講習会等による職業観を養う個人に応じた綿密な支援プログラムのあり方</p>
<p>職場見学ツアー等により複数の職場を実際に見学できる企画を実施したい。まだ希望が明確になっていない利用者にとっては、聞くだけのイメージではなく自分の目で見ることにより、職場の雰囲気等のより具体的なイメージを持ってもらえやすい。</p>
<p>支援対象者同士、親・保護者同士のピアカウンセリング的な場の提供</p>
<p>1. ボランティア、職場体験などのジョブトレーニング</p>
<p>利用者各自の就労場所・住居へ直接行ってのフォロー活動</p>
<p>・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット（チラシ）を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。</p>
<p>就労体験はどうしても会社組織の所になっているが、職人など個人での体験学習の機会を作りたい。</p>
<p>障害者に対する支援センターとの連携。</p>
<p>ハローワークとの連携。</p>
<p>・個別の就労訓練のより一層きめ細かいカリキュラム化。</p>
<p>・就労した卒業生を対象にグループホームのサービスを提供し、継続した支援を行いやすくする。</p>
<p>思いつきませんが、有効なものはどんどん取り入れたいです。</p>
<p>まだ、当自立塾に余裕と実力がないので実施していないが、中国を含む東南アジアの研修生との生活交流を行い、働く意欲や生きる目的を持つ心を耕したいと思っている。条件としては協力先があるので、いつでも可能であるのだが…（特別プログラムで今年はやりたいと思っている）</p>
<p>児童（幼児）、障害者と一緒に作業（遊び）をすること。小学生の山村留学等。</p>
<p>・若者自立塾間での定期交流</p>
<p>・普通自動車免許取得プログラム</p>
<p>海外も活用する</p>
<p>出会いの場を数多く創出すること</p>
<p>・農作業体験（長期的な）</p>
<p>・グループ就労</p>
<p>ピアサポートステーションの構想をもっています。体験者がサポートする側に立つ取り組みです。互いの成長を互いに築いていくことで仲間の広がりを楽しんでいます。</p>
<p>コミュニケーションが苦手な若者達に課題を与えて協力一致して、苦勞しながら何か一つのものを作り上げる体験。E x) ログハウス作り等</p>
<p>ボイストレーニング</p>
<p>塾内（実施期間中）で働いて賃金を得ること。もちろん収入には個人差があることも知ってもらいたい。</p>
<p>1. 無人島でのサバイバル体験</p>
<p>2. スーパー等の一部空間を借りての物品販売</p>
<p>「ジョブシャドウイング」</p>
<p>自衛隊などの組織にたたき込む。できれば短期でNEET教育をすれば、そのような教育ができれば可能になる。現実的ではない日本のそれが日本型ニートを作っていると常々思っている。</p>
<p>①働く、賃金を得るといふ実践的活動であり、自分が社会に通用しないのではという漠然とした不安を払拭することになる。体力に関する不安も解消できる。</p>
<p>②肯定的に評価されることによって自尊心が育まれる。対人交流への不安が解消され、スムーズになる。</p>
<p>①既存の仕事に就くことが困難な人もいるので、彼らに合った仕事を作り出し、支援する。そのための計画は立案中である。</p>

<p>7. 今後の課題について 貴組織が今後、支援を行っていくうえで課題があるとすればどのようなものですか？</p>
<p>ネットワーク機関との連携を維持し、地域にも関連機関にもサポートステーションを定着させていくためには、長期的な取り組みが必要である。そのため今後の課題としては、担当者の人事異動の可能性や事業経費の確保など、事業の継続性が考えられる。</p>
<p>サポートステーション活動を充実させるためのネットワーク構築</p>
<p>医療機関との連携。 地場産業との連携した就労の場作り。 ネットワークを活用して様々な体験を通じ、一般企業への就職を可能にしていくための訓練できる環境の整備。</p>
<p>・リファー先の確保・拡大</p>
<p>・発達障害、精神疾患への対応とリファー</p>
<p>・アスペルガー症候群、高機能自閉症、知的発達障害と思われる相談者がいるが保護者がそれを認めず専門医の受診を受けず先に進めないケース。</p>
<p>・個々に対応した出口（進路）の開拓。</p>
<p>・広報活動は行っているものの、まだ立川市民には充分浸透していないため、地道に都営住宅の各ポストなど新聞を取らない世帯の方にも情報が伝わるように動いていく必要がある。</p>
<p>・また立川市で築き上げているネットワーク先ともっと密に連携していくこと。</p>
<p>・リファー先との関係性の明確化と関係維持</p>
<p>・紹介先が福祉系でリファー先も福祉系となるたらい回し現象</p>
<p>・セミナーの内容、質の向上</p>
<p>・中央への報告等、膨大な事務作業の簡略化、システム化</p>
<p>・地域への浸透</p>
<p>・ハローワークとの連携強化、特にトライアル雇用について</p>
<p>○勤労青少年ホームの一室でサポートステーションを立ち上げているため、相談室が一つしかなく、活動する場が限られている。当事者が待つ場所や、活動する場所がない。</p>
<p>○サポートステーションのネットワークの実際化</p>
<p>○当事者の受け皿（ボランティア・就労等）の拡大</p>
<p>（1）ニート・ひきこもりの発掘及び現状把握のため、市町村単位の組織づくりと、その単位ごとの支援活動の推進。 拠点としては、青少年ホーム等の若者が利用している施設を考えている。</p>
<p>（2）各単位で対応が困難となった事例についてはサポートステーション担当が現地へ行き支援及び、対応をする。</p>
<p>ネットワーク全体の拡大（発見、誘導、参加、出口）、特に利用者拡大の周知徹底（発見いかにしてサポステの存在を知ってもらうか）必要に応じて外に出られる態勢（誘導）。</p>
<p>6-3にて述べた受け皿企業の開拓、インターンシップの充実（出口）をどのように進めていくかが今後の課題と考える。</p>
<p>・今まで自分たちなりに工夫を重ねて実施してきたが、これからは各地の若者サポートステーションの教訓を生かして、よいアイデアを取り入れてよりよいサポステにしていきたい。</p>
<p>・現在実施して5カ月になるが、最初の計画にない事柄ができていく。①面談の内容が複雑化してくると、周りの人に聞かれたくない時が多々あり、声の漏れない面談ルームの必要性を感じている。②利用者の状況から判断して、グループワークを実施し、それなりに成果を上げている。しかし実施場所の確保が難しい時があり、広い場所の必要性を感じている。以上の理由から、面談やグループワークを実施する広い場所の確保をしたいが、経済的な理由でそれも困難である。施設費などとして国の支援を受けられるとありがたいです。</p>
<p>・各専門機関との連携の強化 若者自立塾、発達支援センター、発達障害者支援センター、精神保健福祉センター、障害者職業支援センター、警察関係、医療機関、教育関係機関など</p>
<p>・少々交通の便が悪い</p>
<p>・県内に就労に関する相談機関が少ないので、期待の大きさを感ずる一方で人員不足を感じます。</p>

・就労という出口の問題です。零細企業が多いため現状は大変厳しいものがある。
・軽度発達障害を持っていると思われる若者達の支援のあり方、また、その受け皿
・精神疾患者の支援をしている団体が地域に少ないこと
①利用者の状況を理解し、段階的に就労に結びつくための事業所の確保 (作業所以上アルバイト未満の能力を要求される事業所)
②関係機関との個人情報との受け渡しについて
・利用者への一層の周知活動
・市や町の事業、イベントとの連携
・より一層の少年センターとの連携
・職場体験
・細やかな個別支援にあたるサポーター養成など多様な人材が必要である。
・また、具体的就職先としての受け皿・出口の確保が不可欠。
①紹介できるリソースの確保
②自発的にハローワークなどではなかなか求職活動しにくい人の就労体験先や受け入れ先の開拓
③府内全体をカバーするためのネットワーキング機能の充実
受け入れ企業を多く確保すること。
各リファーマー先等の今まで以上の連携は大変必要であり、リファーマー先の拡充、また、就労に対しての就労受け入れ先企業の充実も考えています。
・ネットワークの各支援機関、市町村などにパンフレット(チラシ)を配布し、関係者・地元住民へのPRに努めている。
職業感醸成のためのイベント等のメニューの拡大
行政・NPO・地域学校等の幅広い連携の充実
現状では保護者に対しての支援がまだ整っていないため、保護者への支援を検討していきたい。
また、県内でもまだ認知度が低いと思われるので、セミナー等イベントを充実させるとともに、他で行われているセミナーにも参加し、PRを行ない利用者の掘り起こしを進めていく必要がある。
・職場体験の体制を確立し受け入れ企業を増すことに加え、就職受け入れ企業を開拓すること。
ネットワーク先の役割を明確化すること等ネットワークの更なる充実を図ること。
1. リファーマー先との関係強化(自立塾等)
2. 支援機関(基本的には半年位で次のステップと考えていますが…)
3. ジョブ・トレーニングの受け入れ企業の開拓
・カウンセラーの常駐の体制をとるための運営体制を作ること
・入塾への誘導に必要な人材、またそれを支える財源の不足(アウトリーチや相談対応など)
・経済的余裕の全くない家庭・本人からの相談を受けた場合の経済的サポート(参加費の免除。奨学金システムetc)の構築
・自立塾自体の社会的信頼、ステータスの向上、自立塾を卒業したことが就職活動でも有利にはたらくように
問い合わせ、申し込みとも減少している。その確保。また、卒業後就職活動がうまくいかず、入塾前の状態になったものもあり、そのフォロー。
スタッフ人材の育成
・医療機関(精神科、心療内科)との連携強化。
・塾生の安定的な確保。
・軽度発達障害、知能遅滞の人の就労先の確保・アフターケア。
経済的な基盤をしっかりとすること
自立塾の入り口と出口問題
入り口(ニートの社会的孤立)
・自立塾の認知度の不足
・ニートの75%が親と同居しているが、親に相談している者は30%で、約半数の者が親以外の相談相手がない。(埼玉県ニート対策委員会発表H18年2月)
社会的孤立の状態のニートを自立塾へどのように誘導すればよいのか。そのシステム作り
※民生委員との連携

<p>出口</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニートの人は履歴に空白がある。その空白をどうするのか？（社会的理解の必要性） ・中小企業への就職は可能であるが、大企業への就職の困難性（正社員になれない）
<p>スタッフ不足</p>
<p>財政難</p> <p>塾生を増やせば良いのだが、管理が難しくなり、適当な人数だと経費が割高となり、そのジレンマ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的な塾生の確保。 ・若者自立塾の存在の認知を広げること。 ・研修及び、卒塾後の受け入れ企業の開拓。 ・安定した経営。 ・専門職員の雇用。 ・続けていく上での収支 <p>・ひきこもり、精神疾患者支援ではなく、あくまで就労を目的とした支援であるという、他との区別の認知活動→参加者への広報戦略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合宿期間の短縮 <p>1. 財源…利用者による自己負担金も、国からの奨励費も利用人数により変動するので、携わるスタッフの生活安定が図られていない。</p> <p>2. 利用期間終了後の支援体制。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就職するための出口作り ・理解のある受け入れ企業の拡大 ・入塾者の確保 <p>単純明快に受け止められるかもしれませんが、やはり「お金」の問題は大きいです。実は毎日のプログラムや対人援助の各場面においてもマンパワー不足を感じているのですが、この部分は各職員のスキルアップとシステム作り、そして工夫で乗り切れると思います。私が気になる部分は、入塾の面談に来られたが入塾に至らなかった方や、入塾を躊躇して立ち止まっている方が、比率から考えると8割くらいいらっしゃるのです。入塾までの継続的な支援と、ニート者の手前におられるひきこもりの方の支援に予算が欲しいと切に思います。</p> <p>社会に大多数の人たちは「ニート」状態にある若者を、怠惰なゆがんだ性格の者たちであるという評価をしています。しかし、決して彼らはただの怠け者ではなく、正しい教育訓練を受けたならば、社会に貢献できる資質と能力を持っている心優しい青年であることを伝えていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・塾生の確保（数人では塾が開けない） ・実習先企業の開拓 ・塾の存在を企業に知ってもらうこと <p>募集活動をしなから現場で塾生と共というのはかなり無理があり偏りが出てしまい難しい。募集活動を欠かさず行うことで塾生確保ができ安定した運営ができるようになる。いくら社会に対して良いことをしてもどこかで生活に苦しむ人がでては本末転倒になってしまう。</p> <p>1. 入塾生の募集を入塾につなげる方法</p> <p>受け入れ先の確保</p> <p>資金と教育者（本物）の確保</p> <p>全国25自立塾の統一された課題であろう。情熱があってもできない人が多い。当自立塾もその課題を抱えて苦勞している。</p> <p>○3ヶ月でプログラムを終了するか、すぐ仕事に就くのは困難なので、就労のためのネットワーク作りと就労支援について、いろいろな方へ理解を求めて協力体制を作っていくこと。</p> <p>○広報活動やる時間があまり取れないので、この事業について県や市町村の方々にご理解いただき、広報活動の支援がほしい。</p>

●若者自立塾とは

(1)趣旨・目的

若年者就労支援策として、平成17年度から実施されている。相当期間、教育訓練も受けず、就労することもできないでいる若年者に対し、合宿形式による集団生活の中での生活訓練、労働体験等を通じて、社会人、職業人として必要な基本的能力の獲得、勤労観の醸成を図るとともに、働くことについての自信と意欲を付与することを旨とする。

(2)若者自立塾での訓練の概要

- ・就労につながるような生活訓練、労働体験、資格取得プログラム等の実施
- ・期間は原則3ヶ月(主として合宿形式とする)
- ・ただし、訓練内容、期間は各塾により異なる
- ・訓練修了後のフォローアップの実施

(3)「若者自立塾」入塾者の要件

- ・義務教育課程修了後1年以上経過し、1年以上前から現在に至るまで、仕事をしていない、求職活動を行っていない、学校に行っていない、職業訓練を受けていない35歳程度までの未婚の若年者

●地域若者サポートステーションとは

(1)趣旨・目的

地域における若者自立支援ネットワーク整備モデル事業として平成18年度より開始された。ニート等の若者の自立を支援するためには、基本的な能力(人間力)等の養成だけに止まらず、継続的に行うことが必要となっている。そこで、地域が、その主導により、若者自立支援ネットワークを構築し、これを活用した若者の職業的自立支援の取組みを一層促進する必要があることから、全国25地域を選定し、地方自治体との協働による「地域若者サポートステーション」を設置した。

(2)事業概要

キャリア・コンサルタント及び臨床心理士等を同ステーションに設置し、以下の①、②の事業を行う。

①相談支援事業

就業やキャリア形成に関する相談を含めた総合的な相談支援の実施。必要に応じ、心理カウンセリングも実施。地域による若者支援機関のネットワークを活用